とある転生者の遊興日記

乾燥海藻類

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある転生もの。前世の記憶を活かしてお金儲けをする話です。人によっては不快に感じる表現があります。ガバ設定です。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 8
第三話 …… 22
第四話 …… 29
第五話 …… 38
第六話 …… 46
第七話 …… 52
第八話 …… 58
第九話 …… 65
第十話 …… 75
第S話 …… 82
第SB話 …… 103

第一話

受付で会員カードを提示し、簡単なボディチェックを受ける。
「チェックＯＫです。ごゆっくりとお楽しみください」
「どうも」
軽く会釈して扉を開く。賑わいを見せる1階を素通りして2階へと進む。その扉の前で再度会員カードを提示して、中に入る。
そこでは粛々とした空気が流れていた。
下が鉄火場だとすれば、上は紳士淑女の集まりだ。
「やあ、重役出勤だね」
ロマンスグレーの老紳士が話しかけてくる。こんな場所には似合わない仕草で。いや、逆だな。俺の方が場違いな人間なのだろう、たぶん。
「山田さん。今日の調子はどうですか」
「うん。まあ、ボチボチといったところかな」
老紳士が苦笑いで答える。
「相変わらずメインレースにしかこねぇな。皐月賞で大儲けしたからしばらくこねぇと

思ってたぜ」

次に声を掛けてきたのはチャラ男風の男だ。こう見えてアパレル関係で大成功を収めた時代の寵児らしい。テレビで見たこともある。その時はパリッとしたスーツを着た、如何にも出来る男といった感じだったが、どちらが本当の姿だろう？

「といっても2番人気と3番人気でしたからね。大した配当ではないですよ」

「だがあんたは上限一杯まで賭けてただろう。配当は17倍くらいだったな。大金だ」

「それでも、ここでは数日で消えてしまう程度の大金ですよ」

「ははっ、ちげぇねぇ」

チャラ男が呵々と笑う。

お察しの通り、ここは賭博場だ。だが違法賭博ではない。パチンコを拡大解釈したようなもの、というのが一番わかりやすいだろうか。

大抵の人は知らないと思うし、警察の人もご存じないらしいが、パチンコというのは換金できるのだ。いや、厳密に言えば換金ではないのだが、まあ細かいことはどうでもいいか。

要するに公認ではなく黙認だ。ひっそりやる分には問題ないですよ、といった感じだろう。

だからこの競馬……もといレース予想もそういうものだと思ってほしい。賭博では

なく遊び。ここは遊興施設なのだ。

さて、結構時間ギリギリに来たから、雑談に興じている時間はない。壁際に立っている黒服の男を手招きして、告げる。

「エルコンドルパサー[1]とスペシャルウィーク[5]。それぞれ単勝で5体。あとオレンジジュースをひとつ」

そう言って会員カードを渡す。黒服は恭しく一礼をしてその場を後にした。それを見送って、近くのソファに腰かける。前世では一度も座ることの出来なかった上等なソファだ。

「随分と手堅くいくじゃねぇか」

「あまり自信がないので」

本当にな。なんでエルコンドルパサーがいるんだよ。イレギュラーにも程がある。予定では上限一杯まで賭けるつもりだったが、エルコンドルパサーが出てきたおかげで全く読めなくなった。

正直スルーしても良かったんだけど、せっかくのダービーだしもったいないと思ってしまったのだ。

まあいい。大勝負は菊花賞までお預けだ。

「俺はキングヘイローに賭けたぜ」

訊いてもいないのにチャラ男が答えてくる。だが残念だったな。キングヘイローが花開くのはかなり先の話だ。

……とも言えないんだよな。エルコンドルパサーがマジで読めない。もしかしたらキングヘイローがダービー制覇する可能性も、無きにしも非ずだ。

チャラ男は俺の反応にも構わずキングヘイローの良さを語ってくる。おまえの推しなのは分かったから少し黙ってくれないかな。

その願いが通じたのか、チャラ男が静かになった。まあ本バ場入場が始まったってだけだけど。

大モニターに出走ウマ娘たちが表示される。

とそこで、ようやく黒服の男が帰ってきた。

「お待たせいたしました。ご確認ください」

ソファの脇に設置されたテーブルに、オレンジジュースと会員カード、そして『1』と『5』が刻まれたウマ娘人形が5体ずつ、計10体のウマ娘人形が置かれた。

今は1体10万円の価値だが、レースが終われば価値が変動する。

といっても1番人気と2番人気だからな。配当は大したことない。当然だが、どっちが来ても損にはならない。両方当たるなんてことはないわけだし。

「うぉぉぉ。頼むぞキング。今度こそGⅠライブのセンターを。ダービーウマ娘になる

んだ！」

なんかチャラ男が燃えとる。

「セイウンスカイ。ダービーも取って、菊花賞も取って、三冠ウマ娘になるのです」

山田さん、あんたの推しはセイウンスカイだったか。そういや皐月賞で涙流して喜んでたな。

ファンファーレが鳴り響き、ゲートインへ。

日本ダービーが、スタートした。

「うぉぉぉ！　キングが行った！　キングが行ったァ！　えっ、キングが行ったアァッ!?」

チャラ男よ、3回も言わなくても分かるよ。キングが逃げ、そりゃ予想外だよな。俺にとっては知っ予てる想通りことだけど。

セイウンスカイが2番手。スペシャルウィークが中団に構え、エルコンドルパサーはそのすぐ後ろか。

道中大きな動きはなく、レースは最終コーナーを回ってラストの直線へ。ここでセイウンスカイがキングヘイローをかわして先頭に立った。

「ぬぅおおおぉぉ！　キングが……俺のキングが……いや、キングならここから……」

いや無理だって。あの表情を見ろ。どう見ても一杯だ。

「よし！」
　山田さん。喜ぶのは早いよ。あと５００メートルも残ってる。むしろここからが本番だ。ほら、スペシャルウィークがかわした。そして内からエルコンドルパサーがきた。並んで、かわしたな。こりゃ決まったか。
　……いや、スペシャルウィークが粘っている。というより、詰まってないか、これ？
　おいおい、これ追いつくぞ。追いつ……どうなんだこれ？
「写真判定ですな」
「どうでもいい。キングじゃないならどうでもいい」
　チャラ男が燃え尽きて灰になっていた。まあ掲示板も外したからな。完全に作戦ミスだ。セイウンスカイを警戒し過ぎたな。結果論だけど。
　写真判定が終わり、結果が表示される。
　一番上に表示された番号はエルコンドルパサ[1]番ー。いや、違う。
「……同着？」
　ダービーで同着？　そんな、マンガじゃあるまいし。いや、マンガみたいな世界だったわ、ここ。
「いやはや、おめでとう。まさかここまで読み切って？」
「ははっ、まさか。偶然ですよ」

さすがにダービー同着なんて読めんわ。
「おめでとうございます。ウイニングライブはどういたしますか？」
黒服が問いかけてくる。ここでは予想が的中した客に、レース場（現地）まで送ってくれるサービスも行っているのだ。利用したことはないけどな。
「いや、結構。このまま帰ります。山田さん、ではまた」
「ええ、次は菊花賞……ですかな？」
「おそらくは」
「次こそは俺のキングが勝つからな！」
いや、俺に宣戦されてもなぁ。
残ったオレンジジュースを飲み干して店を出る。
たまたま目の前に在った古物商のお店でウマ娘人形を売却してタクシーへと乗り込む。
今日は豪華な夕食をとれそうだ。

第二話

「……お客さん、こないですね～」

カウンター席に座るウマ娘がぼそりとつぶやく。曇天の空は今にも泣きだしそうな雰囲気で、店内は薄暗い。

《珈琲館》という安直な喫茶店が俺の職場であり自宅でもある。

「雨、止まないですね～」

眼前のウマ娘はウチの唯一の従業員である。競走ウマ娘ではない。競走ウマ娘というのは、生まれた時から名前を持っているらしい。サラブレッドは生まれた時からサラブレッドということだ。

彼女は名前を持っていなかった。つまり競走ウマ娘ではなく、ただのウマ娘である。とはいえ、人間より脚は速いし、パワーもある。ウエイトレス兼用心棒として雇っている。

「雨が止んだら客が来ちゃうじゃねぇか」

「……店長は時々おかしなことを言いますね～」

やれやれといった感じでため息を落とす。二十代で城店持ちというのは、まあまあ成功

者と言えるのではないだろうか。

舞台が現代では知識チートなんてできるはずもない。そもそも前世知識なんてのは、カンニングか前借りのようなものだ。俺は別に地頭が良いわけでもないので、二十歳過ぎれば只の人などと言われないように、可もなく不可もなくといった成績を取り続けてきた。名門でもない大学に通い、在学中に『予想屋』で稼ぎ、卒業してすぐに喫茶店の店長になった。

その後、2階行きの権利を買い、さらに稼いだ。もう少し稼いで、あとは不動産でも買って不労所得でぬくぬくと暮らす、というのが人生の目標である。

前世であくせく働き過ぎたので、今世はこれくらいでいいだろう。思えば趣味なんか競馬くらいしかなかったな。

「少し早いが昼食にするか。ほれ、サンドウィッチ」

ウマ娘はよく食べる。普通のウマ娘でも3人前くらいは簡単に平らげる。だから賄いの出る飲食店で働くウマ娘は多いらしい。

そして人間以上に運動欲求がある。デスクワークのウマ娘はジムに通ったりジョギングしたりして解消していると聞く。

そんなことを考えていると、不意に視線を感じた。この店にはふたりしかいないので誰の視線かは一目瞭然である。そちらに目を向けると彼女の皿の下絵が瞳に飛び込ん

できた。言葉で催促しない辺りは奥ゆかしいと言えなくもないが。
（俺の3倍の量があったはずなんだがな……）
なんとなく無視する気にもなれず、一切れだけを手に取って、残りを渡す。彼女はオクターブほど高い声で礼を言って食事を再開した。
午後になっても天は泣き止む様子もなく、結局雨宿りの客が3人ほど来ただけだった。夕方5時、定刻通りに店を閉める。たったひとりの従業員の退店を見送り、店の電気を消そうとスイッチに指を置いたところで、扉が軽くノックされた。
クローズの看板が見えないのか？
さりとて無視するわけにもいかず扉に近づく。そしてガラス部分から見えた顔は見知った顔であった。というか山田さんだった。
とりあえずロックを解除して扉を開ける。
「こんにちは。すまないね、こんな時間に」
「その口ぶりでは、たまたま立ち寄ったというわけではなさそうですね、山田さん」
「そうだね。少し話せるかな？」
「コーヒーくらいしか出せませんよ」
「かまわないとも」
どうやら引く気はなさそうだ。まあこの雨の中追い出すのも気が引ける。用心棒は

帰してしまったが、こちらに危害を加えたりはしないだろう。
カウンター席に案内してコーヒーの用意を始める。その間、山田さんは口を開く素振りはない。コーヒーが出来上がるまで待つようだ。
そして数分後、挽きたてのコーヒーを山田さんに提供した。
「うん。悪くないね」
悪くないってのは褒め言葉なのかね。普段余程いいものを飲んでいるのだろう。素人に毛が生えた程度の俺の腕じゃあ、そんな評価もやむなしか。
俺も自分用に淹れたコーヒーを飲む。うん、まあ、悪くない。
「で、お話というのは？　というかよく俺の店が分かりましたね」
「不愉快かも知れないが、調べさせてもらった」
もしかしてストーカーか？　爺さんに好かれても困るのだが。
「まずは自己紹介をしよう。私はこういうものだ」
名刺を手渡される。聞いたことのある会社だ。確か出版社だな。そこの……会長？
予想はしてたが、やっぱりお偉いさんか。しかし会長ってのは、どっちなんだろうな。社長よりも偉いパターンか、それともただのお飾りのパターンか。
「会長様が私に何か御用でしょうか？」
いかん。思わず畏まった口調になってしまった。根っからの小心者だな、俺は。

「砕けた口調で構わんよ。会長といっても大した実権はない。少しキミに頼みたいことがあってね」
「はぁ、何でしょうか？」
　会長はもう一度コーヒーを飲み、俺の目を見つめてきた。
「キミは菊花賞でセイウンスカイが勝つと予想したね」
「そうですね」
「秋天のときは予想屋に来なかった」
「体調を崩しまして」
　沈黙の日曜日だったからな。あといないはずのエルコンドルパサーもいたし。普通にエルコンドルパサーに賭けても良かったが、配当もそんなに高くなかったしスルーすることにした。
「キミも知っていると思うが、ウチは月刊トゥインクルという雑誌も出していてね」
「……そうでしたね」
　忘れてたわ。雑誌名は知ってたが出版社までは覚えてなかった。というかこの世界はウマ娘関連の本が多すぎるんだよな。さすが世界的なエンターテインメントだけはある。
「キミの眼には何が見えているのか気になってね」

山田さんが俺の眼を覗き込むように凝視する。

俺は基本的に覚(勝)えている(てる)レースしか買わない。チャラ男がメインレースにしか来ないと茶化したのもそれが理由だ。

そして珍しくメイクデビューなどを見に来たと思えば、あっさりと的中させる。それが不可解に映ったのかもしれない。

結果的にそうなったとはいえ、ダービー同着という１００年に一度レベルの珍事さえ的中させたのだからな。

「単刀直入に言おう。キミに記事を書いて欲しいのだよ」

「月刊トゥインクルの記者になれと？」

「キミが望むのならばそれもいいが、あそこは激務だからね。余程の熱意が無ければ続かないと思うよ。私としては偶に記事を書いて、それを売ってもらえればそれでいい。トレセン学園の取材許可証も用意しよう」

「随分と買ってくれているようで」

トレセン学園は入場の厳しい場所である。記者にも厳しい制限があり、一般人の立ち入りはほぼ不可能に近い。年に一度開催される聖蹄祭も招待状がなければ入場できない。

「不定期のコラムでも構わない。どうだろうか？」

コラムか。正直言って興味はある。掲載されるのがメジャー誌なのは少し緊張するが。

結局、山田さんがコーヒーを飲み干すまで悩んだあげく、俺はその依頼を引き受けることにした。

◇

11月某日。俺は月刊トゥインクルの記者である乙名史悦子氏と共にトレセン学園に取材へ行くことなった。

ご丁寧に名刺と最新型のデジカメまでプレゼントされて、もはや逃げ場なしといった感じである。まあ逃げるつもりはないけど。

「私はチームリギルの取材に行きますが、北川さんはどうしますか？」

「俺は適当にぶらついてますよ。これがあれば不審者には間違われないでしょ」

首から提げたゲスト用カードを振ってみせる。ただでさえ男は目立つ場所だ。こういうのはちゃんと見せておいた方がいい。

「誰を取材するのかは気になりますが、まあいいでしょう」
「そちらはリギルの取材ということですが、ジャパンカップ関連ですか？」
「そうですね。リギルからはエアグルーヴさんとエルコンドルパサーさんが出走しますから。それとウィンタードリームトロフィーについてもですね」
「ならひとつお願いがあります。エルコンドルパサーの写真を多めに撮っておいて貰えませんか？」
「なるほど！　北川さんの推しはエルコンドルパサーさんなんですね。分かりました。任せておいてください」
そう言って乙名史さんは自分の胸をドンと叩いた。別に推しというわけではないが、まあいいや。殊更に否定することでもないし。
そうして俺たちは三女神像の前で別れた。
スマホを操作して、会長から送られてきたデータを眺める。それは今期にデビューしたウマ娘、そしてデビュー予定の有力ウマ娘たちのデータが詳細にまとめられていた。
「やっぱアドマイヤベガかな。テイエムオペラオーはリギルだし」
アドマイヤベガは翌年のダービー馬だ。テイエムオペラオーは皐月賞を勝つが、その後がいまいち振るわない。テイエムオペラオーが覚醒するのはシニア（古馬）になってからだ。そもそもテイエムオペラオーは俺が単独で取材できる相手じゃない。

テイエムオペラオーだけではなく、チームリギルが取材に対してかなり厳しいのだ。フリーライターは当然のように弾かれるし、各社ひとりずつの専属記者が付いている。月刊トゥインクルでも乙名史さん以外は取材ができないらしい。つまり俺が同行しても、俺はカメラマンに徹するしかないのだ。

というわけでアドマイヤベガを取材しようと思うのだが、扱いはかなり気を遣わなくてはならない。俺の知るアドマイヤベガは、本来は双子だったが、片方の胎児をつぶされて生まれてきたというエピソードを持つ。

こちらのアドマイヤベガも似たようなものらしく、さすがにつぶされはしなかったが片方が死産だったと聞いている。

そしてメイクデビューでは圧倒的な強さを見せつけたが、熱くなりすぎて斜行し、1位入線したものの、4着降着となった。

よって世間の評価は『強いが気性難』である。

「さて、アドマイヤベガのチームルームは……」

学園地図で場所を確認する。この学園、デカすぎるんだよなぁ。まあ生徒だけで2000人近くいるらしいし、それも納得なんだが、地図なしだと絶対迷いそうだ。

「こっちだな……ん？」

進路を変更して一歩踏み出したところで、言い争うような声が聞こえてきた。女の子

の声。いや、それよりも気になる単語が飛び込んできたのだ。
「ウオッカ……だと？」
　声の聞こえた方向に歩いていく。角をひとつ曲がったところで、彼女たちはいた。ふたりの女生徒。何やら言い争っているようだが、本気の喧嘩ではなさそうだ。そして俺に気づいたのか、口論がやみ、ふたりの視線がこちらに向く。
「トレーナー……じゃねぇよな」
「バカね。首に記者カード提げてるじゃない」
「バカって言うな！」
　そして睨み合うふたり。どっちがウオッカだろう？　あるいはウオッカの噂をしていただけで、どっちもウオッカじゃないパターンもあるな。まあ聞けば分かるか。
「はじめまして。月刊トゥインクルの北川令（きたがわれい）です」
　そう言って名刺を渡す。嘘ではない。名刺にもちゃんと月刊トゥインクルの契約記者と記されている。
「おおっ！　一流雑誌じゃねぇか。俺の取材とは分かってるな、アンタ」
「バカねウオッカ。アンタじゃなくてアタシを取材しに来たのよ」
　ウオッカはこっちのボーイッシュな方か。しかしこの世界、ホントに世代がおかしいことになってるな。ウオッカの登場はもっと先のはずだろ。

「出来ればふたりとも取材させてほしいな」
「もちろんいいわよ。何でも訊いてちょうだい」
「俺も構わないぜ」
「なら基本情報から。名前とクラス、目標をお願いします」
「アタシの名前はダイワスカーレット。ジュニアAクラス。目標はもちろん1番になることよ。1番速くて、1番強い。1番みんなに認められるウマ娘になるの！」
　こっちはダイワスカーレットかよ。宿敵と一緒にいるってのは、何か因縁めいたものを感じるな。
「俺はウオッカだ！　こいつと同じジュニアのAクラスだぜ。目標は誰よりもカッケーウマ娘になること。だからダッセーことはしねぇ。覚えといてくれよな！」
　ビシッとサムズアップで答える。本人は格好つけてるつもりだろうけど、まだ可愛さや幼さの方が大きい感じだな。
　その後、色々な質問をしたが、ふたりは張り合うような返答が多かった。それがギスギスしたものではなく、どうにも微笑ましくてつい言ってしまった。
「良いライバル関係だね」
　ふたりは一瞬あっけにとられ、すぐさま反論してくる。
「違うッ！　コイツとはただの腐れ縁よ」

「そうだぜ！　しょうがなく付き合ってやってるだけだって！」
「しょうがなくってなによ！」
「ホントのことだろ！」
なんか米国のカートゥーンアニメみたいだな。
「最後に写真いいかな？」
俺がそう言うと、ふたりはピタリと喧嘩をやめた。ダイワスカーレットはコンパクトミラーを取り出して髪の毛を整え始め、ウオッカはポーズの確認を始めた。この辺りは年相応だなぁ。

◇

俺の書く最初の記事。対象にしたのはエルコンドルパサーだった。さすがにウオッカとダイワスカーレットは、今の段階では知名度が低すぎる。
エルコンドルパサーを題材にしたのは、やはり史実でのジャパンカップの勝者だからだ。

現在の戦績は7戦6勝。負けたのは唯一サイレンススズカのみ。これで世間の評価は少しだけ下がった。だが逆に、関係者や”濃い”レースファンはエルコンドルパサーの評価を上げた。というのも、この時のサイレンススズカは5連勝中で乗りに乗っていた。対決した毎日王冠でもサイレンススズカは絶好調だった。そんな彼女に、エルコンドルパサーは食らいついたのだ。

だから俺は褒めた。メチャクチャ褒めた。エルコンドルパサーは素晴らしいウマ娘だ。世界に通用するウマ娘だ。ダービーに続いてジャパンカップも勝つだろう。ジャパンカップを勝って世界に羽ばたいていく。そんな記事を書いた。

が、どうやら褒めすぎたことが問題になっているようだ。

ジャパンカップで惨敗したらどうするつもりだと。かといって、ジャパンカップを勝った後に出してもインパクトは弱い。個人サイトで好き勝手書くのと違い、業界で1、2を争う雑誌なのだから、慎重にもなる。

「私は良い記事だと思います。愛が伝わってきます！」

乙名史さんはフォローしてくれたが、別に愛はない。

「まあ、採用するかどうかはそちらに任せますよ」

こっちとしては書いて提出したという事実があればいい。これで義理は果たせる。ダメなら俺には向かなかったということだろう。

まあ結論から言えば、俺の記事は掲載された。しかもほとんどが採用された。他のジャパンカップ出走者が2ページ、多くても4ページの紹介記事なのに、エルコンドルパサーだけは8ページの特集だった。

そしてその記事の影響があったのか定かではないが、エルコンドルパサーはジャパンカップで1番人気に推された。

実は、分からないでもないのだ。史実ではエルコンドルパサーは1800メートルまでのレースしか経験がなかった。要するにジャパンカップは距離の不安があったわけだ。だがこの世界のエルコンドルパサーはダービーウマ娘である。場所もダービーと同じ東京レース場。1番人気も納得だ。多分、俺の記事なんかなくても1番人気になってたと思うよ。

当然というか、エルコンドルパサーは勝った。

俺も儲けた。

ありがとう、エルコンドルパサー。

第三話

「べた褒めね。大したものだわ」

東条ハナは率直に感心した。月刊トゥインクルから送られてきた取材記事の最終稿、チームリギルに所属するエアグルーヴとエルコンドルパサーの記事である。

エアグルーヴの記事を書いたのは、東条ハナもよく知る乙名史記者。そしてエルコンドルパサーの記事を書いたのは、北川令という記者だった。その隣に監修として乙名史の名前がある。

（この北川令という記者は、よほどウチのエルに入れ込んでいるみたいね）

何せエアグルーヴの倍のページ数を書いているのだ。そう捉えるのも無理はないだろう。

（確かに今回のジャパンカップは、恐らくエルかエアグルーヴのどちらかが勝つ）

東条ハナはそう確信していた。というのも、今回のジャパンカップは海外の有力ウマ娘が辞退しているという異例の事態となっていた。そのため、東条ハナが最も警戒しているのはダービーウマ娘のスペシャルウィークだった。

（にしてもこれは、見せていいものかどうか）

ああ見えてエルコンドルパサーは少々お調子者のきらいがある。同チームのエアグルーヴや、ダービーで互角の戦いをしたスペシャルウィークをなめるようなことはしないだろうが、こんなべた褒めの記事を読めば有頂天になるかもしれない。

そんなことを考えていると、トレーナー室の扉がノックされた。そして返事をする間もなく開かれる。

「お邪魔するデース！」

「お邪魔します、トレーナー」

予想はしていたものの、そのふたりを見て東条ハナはため息を零した。

「エル、いつも言っているでしょう。ノックをしても返事を待たないなら意味はないって」

「いや～、早くトレーニングしたくて、つい」

「トレーナー、私ももっと……」

「グラス、焦ってはダメよ」

グラスワンダーの言葉を遮って、東条ハナはやんわりと断りを入れた。休養後グラスワンダーは2つのレースに出走したが、5着、6着とまったくのいいとこなしで終わった。

その結果を見て、東条ハナはグラスワンダーをジャパンカップから外した。

「ゆっくりと、じっくりと行きましょう。あなたの本番は来春からよ」
「来春……」
　グラスワンダーがグッと拳を握る。親友であるエルコンドルパサーが凱旋門賞を目指して羽ばたき、同期であるセイウンスカイは二冠ウマ娘になり、スペシャルウィークはダービーウマ娘になった。
　自分だけが取り残されているような気がする。グラスワンダーにはそんな悔しさがあった。
（有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念……もし選ばれたのなら、私は……）
　身体はまだ思うように動かない。だが精神は、研ぎ澄まされた日本刀のように切れ味鋭くなっていくのを感じている。
　切っ掛けを欲していた。切っ掛けさえあれば、心に燻っている種火が大火となって燃え上がる。彼女にはそんな予感があった。
「ところでトレーナー、何を読んでたんデスか？」
　エルコンドルパサーがテーブルの上に目を向ける。東条ハナは少し悩んだ後、どうせ発売されれば同じことだと思い、エルコンドルパサーにそれを渡した。
「お～、アタシの特集デスね。そういえばこの前の取材でいっぱい写真撮られまシタ」
　計８ページの特集に目を通していき、エルコンドルパサーは徐々に体温が上昇してい

くのを感じた。

——スピード、スタミナ、レースセンス、いずれも一流にしてシンボリルドルフと比してなんら劣るところはない。

——芝・ダート、バ場状態、距離、ペースの緩急といった諸条件を難なく克服できる精神力の強さは群を抜いており、すでに一流の風格すら感じさせる。

——これといった弱点が無く、全てに均整が取れていて、全てが高い次元で融合している。本当にパーフェクトと言っていい。

——間違いなく世界に通用するウマ娘。今世紀最高のウマ娘と言っても過言ではない。

ざっと抜き出しただけでもこんな感じである。過去のレースについても詳細にまとめられており、東条ハナをもってして「よく見ているな」と感心するほどであった。

「ここまで評価されると何だか照れマスね～」

顔の上半分を隠すマスクで分かり難いが、ほほは間違いなく紅潮していた。

自分の世評が高いことは知っている。その評価を受けるだけの成績を残してきた。負けたウマ娘はただひとり、サイレンススズカのみ。それが悔しくもあるのだが。

「でもこんなおとなしい書き方は、乙名史さんらしくないですね」
「グラス、少しルドルフが感染ってきたのではないか？」
「え？　うつるって……いえっ！　別におとなしいと乙名史さんをかけたわけでは！」
一瞬キョトンとしたものの、すぐに思い至ったのか、グラスワンダーはすぐさま訂正した。
「ふふっ、書いたのは乙名史さんではない。北川令という女性記者だ」
令という名前と、乙名史が女性であることで、東条ハナにはバイアスがかかっていたのだろう。彼女は北川令を女性記者だと思い込んでいた。
そして心配していたエルコンドルパサーの反応も悪いものではない。慢心する様子はなく、逆に奮起しているように見えた。
（どうやら杞憂だったようね。これなら、彼女にエルの壮行記事を依頼するのも悪くないかもしれないわね）
来たるべき時を思い、東条ハナはそんなことを考えていた。

◇

時間は少し巻き戻る。

その日のジュニアＡクラスではふたりのウマ娘が注目を集めていた。

「ねぇねぇ、ふたりがあの月刊トゥインクルから取材を受けたのってホントなの？」

クラスメイトにそう問われて、ウオッカはムフーッと鼻息を荒くした。

「いやーそうなんだよ。なんつーか、見てる人は見てるっつーか、俺の身体から迸るオーラっつーの？　そういうのがさぁ」

「なに言ってんのよ。あの人はア・タ・シを取材しに来たのよ。アンタはついでしょ」

「なぁにい!?　むしろついではオメーだろ。俺の方が質問多かったし、見る目が違った。こう、期待してる目だった！」

「質問の数も内容も同じでしょ。アタシたちに取材したんだから。記憶力大丈夫？」

「アァンッ!?」

先ほどまでニコニコしていたふたりが反射の速度でいがみ合いを始める。見慣れない人が見れば険悪に見えるが、クラスメイトたちにはいつものことで、また始まったという感じである。

「写真も撮られたんでしょ？」

ピタっと動きを止めて、まずはウオッカがしょうがねぇなぁといった感じで前髪をか

き上げた。
「気の良い兄ちゃんでよ。カッケーポーズを教えてもらったんだぜ」
背景にゴゴゴゴゴとかドドドドドとかパパウパウパウフヒィーンなどが浮かんでき
そうなポーズを決めて、ウオッカはフゥーとため息を吐く。
「アタシのティアラも褒めてくれたのよ」
母親譲りのティアラを指でなぞりながら、ダイワスカーレットはエヘンと胸を張っ
た。
「で、いつ雑誌に載るの？」
「ん～、なんだかんだ言っても俺らまだデビュー前だからな。然るべき時に、つってた
ぜ」
「どれだけアタシが有望株でもデビュー前なら仕方のないところね」
窓から曇天の空を見え上げて、ふたりはほほをかきながらつぶやく。
そんなふたりに対し、クラスメイトたちは一斉に突っ込んだ。
「まずはCクラスに上がらないとね」
――と。

第四話

この世界でまず戸惑ったのは、ウマ娘の存在ではなく、ウマ娘（レース）に対する人々の熱量である。競馬ファンの熱量も侮れないものはあるが、あれはお金がかかっているからだ。無論それ以外の部分でお馬さんに入れ込んでいるファンもいるだろうが。

この世界の競馬（レース）にギャンブル要素はない。少なくとも表向きは。どちらかといえばアイドルファンに近いかもしれない。幸か不幸か、俺はアイドルに浮かされることはなく、そんな知り合いもいなかったので、彼ら彼女らの心中を推し量ることはできないのだが。

ともあれ。

有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念である。有馬記念ではなく有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念。

未だに慣れないこの漢字。

小学生の頃、「ウマ娘は四つ足ですか？」と先生にやんわりと怒られたことを思い出す。

意識していないとどうしても馬と書いてしまう。

今日はそんな有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の三日前。俺は枠順発表会を兼ねた記者会見を見ていた。

主に自分のために設置した大型のテレビが目当てなのか、今日は割とお客さんが入っている。

「セイウンスカイは1枠2番か。いけるぞ、これは」

カウンター席、俺の目の前に座っている会長さんがグッと拳を握る。ヒマなのかな。以前に実権はないと言っていたが、案外本当なのかもしれない。

「キミはどう予想するかね？」

「難しいところですねぇ」

何となくとぼけてみる。この時点でグラスワンダーはそこまで注目されているウマ娘ではない。ジュニア期は勝ちまくって王者などと持て囃されていたが、怪我をしてクラシックシーズンのほとんどを棒に振ったことに加え、休養明けに出走したＧⅡレースふたつも微妙な成績だった。今回選ばれたのも、過去の栄光という部分が大きい。

口さがない連中は「グラスワンダーは終わった」と言っている。

一番注目されているのは、菊花賞で世界レコードを出したセイウンスカイだ。女帝ことエアグルーヴと人気を二分している。

「店長～。メロンパフェとバナナパフェ追加で～す！」

「了解。メロンパフェとバナナパフェね」
聞こえてきた声に、考えを霧散させる。
有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の記事なんかどこも力を入れて書いているから、俺の出番なんてない。
レースの結果は、俺の知る通りだった。
マスコミが手のひら大回転させるさまが目に浮かぶな。

◇

年が明けて、俺に二度目の依頼が来た。デビュー前で、スターになりそうなウマ娘はいないかということなので、以前に取材したウオッカとダイワスカーレットのデータを送った。
「掲載前にチームスピカに確認取って下さいよ」
『言われなくても分かってるよ。じゃあこのデータ、ありがたく使わせてもらう』
編集長とそんなやり取りをして通話を切る。

そして2月某日。チームリギルが記者会見を開き、エルコンドルパサーの海外遠征が正式に発表された。

その翌日、編集長から電話がかかってきた。

『昨日の会見は見ただろ。ウチからも取材の打診をしたんだが、向こうはあんたを指名してきたんだよ。よっぽどあの記事が受けたんだろうな』

「なるほど」

そりゃ女の子はとりあえず褒めとけと前世で学んだからな。

『で、どうする?』

「そうですねぇ」

正直リギルって怖いんだよな。トレーナーの東条ハナはやり手のクールビューティーって感じだし、所属ウマ娘もシンボリルドルフを筆頭に貫禄のあるウマ娘ばっかりだし。

『なんなら乙名史を付けようか?』

「……お願いできますか」

『ああ、むしろこっちからお願いするわ。うるさいったらありゃしねぇ』

そんなわけで、俺は再びトレセン学園にやってきたのだった。

乙名史さんと連れ立って、リギルがトレーニングしている場所へと足を運ぶ。東条ト

レーナーに名刺を渡すと、ひどく驚いた顔で本人か確認された。
「……男性だったのね」
これはよくある間違いだった。名前が名前なものだから、字面だけなら性別を間違われることは昔からよくあった。
ここはキレるべきかな？「令が男の名前で何が悪いんだ！　俺は男だよ！」みたいな感じで。
……やめておこう。ネタや冗談が通じる相手でもなさそうだ。月刊トウインクルにも迷惑がかかるだろうし。
「どうする？　エル」
「ちょっと考えマース」
ふたりがよく分からないやり取りを交わす。エルコンドルパサーは少し困惑しているようだった。
それから多少の雑談を挟み、俺たちはコース脇に設置された簡易テーブルに案内された。対面に東条トレーナーとエルコンドルパサーが座る。
「では始めましょうか。北川さん、エルの遠征、及び凱旋門賞挑戦について、どうお思いかしら？」
いきなり直球できたな。ここは少し会話を楽しんでみるか。

「シンボリルドルフは何故3度の敗北を喫したのか」
俺がそう言うと、東条トレーナーの柳眉がピクリと動いた。エルコンドルパサーも驚いているようだ。まあ自分の話題を振ったのに、全く関係ないシンボリルドルフに話が飛んで行ったのだから仕方ないともいえるが。
「あなたたち、トレーニングを続けなさい！」
東条トレーナーが右手を振るってチームメンバーに指示を送った。動きを止めていたトレーニングコースのウマ娘たちがいそいそとトレーニングを再開する。
ん？　まさか聞こえてないよな。結構離れてるし、俺の声もそう大きくなかったはずだ。
「彼女は、ルドルフは私が初めて担当したウマ娘です。すべては私の力不足、指導力不足だと思っています」
「シンボリルドルフ……さんが負けたのは、ジャパンカップ、秋の天皇賞、そして遠征したアメリカでのレース」
そう言って指を3本立てる。負けたといってもジャパンカップは3着、秋天は2着と、大敗したわけではない。
問題なのは海外遠征したレース。そのレースでシンボリルドルフは生涯で初めて掲示板を外した。

外国勢に対して能力で劣っていたのか？　そうではない。敗因は能力とは別のところにある。

そのレースでシンボリルドルフは？ 靭帯炎を患った。アメリカ特有のコース事情が影響したと言われている。

個人的な意見だが、これは防げたのではないかと思っている。故障の懸念があったのなら、レースを回避するという選択肢もあった。

この世界のトレーナーという職業は、厩務員と調教師と、多少の騎手が一緒になった存在だと思っている。

ウマ娘は馬と違い、人間と意思疎通ができる。

だからトレーナーは、ウマ娘を信頼しすぎることがままあるのだ。

実際シンボリルドルフの海外遠征に対して、東条トレーナーは調整から何からを、本人と現地スタッフに任せている。

当時リギルには、すでにシンボリルドルフ以外にもメンバーがいた。だから東条トレーナーは同行するわけにはいかなかったのだろう。

「私がルドルフを、信頼しすぎたから、ルドルフは負けたと？」

「どれだけ成熟していても、根っこの部分は十代の乙女にすぎません。初めての海外遠征。不安もあったでしょう。しかし弱気を見せるわけにはいかない。弱音を吐く相手

もいない。日本でも大きく取り上げられていましたね。その重圧たるや、如何ほどのものか、僕には想像もできません。ですがあなたはこう思ったのではありませんか？　ルドルフならば大丈夫、だと」

「……そう、ね」

まあ本当のところは分からない。所詮は素人の予見でしかないのだ。どれだけ気を配っていても、故障する時は故障する。シンボリルドルフの故障が運命によって決められているというのなら、それはもう諦めるしかない。そうではないと信じたいが。

「でもエルに同行することは、現状では不可能だわ」

東条トレーナーは申し訳なさそうに、隣のエルコンドルパサーに視線を送った。当時と比べてリギルは大所帯となったが、その頃と変わらず全てのことを東条トレーナーがひとりで取り仕切っている。

有能すぎるのも問題だな。これほどの大所帯なら、サブトレーナーのひとりやふたりいてもおかしくはないはずなのに。

「とはいえ、あの頃より体制は整えているわ。だからこそ、あなたに依頼も出したのだから。男性だとは思わなかったけれど。もう一度訊くわ、エル。どうする？」

「そうデスね～。ま、いいんじゃないデスか。部屋も別々デスし」

「そう。では改めてお願いするわ、北川さん。フランス滞在中、エルのことよろしくお願

いします」

そう言って東条トレーナーは恭しく頭を下げた。

……つまり、どういうことだってばよ？

第五話

あ、ありのまま今、起こったことを話すぜ！
俺がエルコンドルパサーの取材をしていたら、フランスまで密着取材を行うことになっていた。
何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった。
頭がどうにかなりそうだった。
伝達ミスだとかサプライズだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねぇ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。
『そうか。どうも性別を勘違いしているような感じだったから、本人を見て判断してくれと言ったんだが、考えは変わらなかったか』
電話口で編集長は開口一番にそう言った。
『よっぽど気に入られたみたいだな、色男』
「茶化さないでくださいよ。こっちはパスポートも持ってないんですよ」
『そんなもん一週間もありゃ取れるだろ。出発は4月頃なんだから準備期間はあるはずだ。まあ、どうしても嫌だというなら、俺から断りを入れてもいい』

どうやら強制ではないようだ。当然だろう。俺は正式な社員というわけではないのだから、いくら編集長といえども命令権はない。ああでも、俺を名指ししたということは個人的な依頼ということにもなるのだろうか。うーむ、線引きが難しいな。

「角が立ちませんかね。代わりに乙名史さんでも行かせるんですか？」

『あいつはちと暴走癖があるからなぁ。それに、俺たち業界人は密着取材というものに及び腰なんだ。あんたも例の一件を覚えているだろう？』

「ああ、あれですか」

前世でも起きたあの事件だ。こちらではいくらかマシだったようだが。

『そうだ。あの一件で、ひとつの局と雑誌が完全に締め出された。一部のアホ共が暴走したせいで、こっちまでとばっちりを食らうところだったよ。北原トレーナーは何とか矛を収めてくれたが、六平トレーナーは未だにブチギレてる。まああの人は元々マスコミ嫌いだったからな。俺の知り合いの記者は岩塩ぶつけられてゴミ置き場に捨てられたらしいし』

え？　なにそれ怖い。普通に事件では？　というかなんで岩塩？　塩撒いとけ的なアレなの？　やっぱ中央は魔境だわ。

『今さらあんたの良識を疑うつもりはない。短い付き合いだがそれくらいは分かる。だからそういった心配はしていないが、どのみちこれから忙しくなるんでな。さすがに密

着取材に人はさけん』

凱旋門賞というのは、当然ながらひょいと行って勝てるようなレースではない。エルコンドルパサーの場合は４月に渡仏し、１０月のレース本番までの間に、欧州仕様の脚に鍛えなおすプランだ。

要するに半年近くの間フランスに滞在しなければならない。

「まあ、少し考えてみますよ」

そう言って通話を切る。

これが夏くらいなら二つ返事で引き受けただろう。俺が渋っているのは、稼ぎ時を逃すからだ。

でもまあ、落ち着いて考えてみれば、この春はそこまでおいしいＧＩはなかった気がする。皐月賞を取って渡仏するのも、ありっちゃああありかもしれない。

「それよりも店をどうするかなんだが……」

「給与補償はありますよね？」

唯一の従業員が不安そうにこちらを見ている。半年間だからなぁ。仕事に慣れたやつは確保しておきたい。一から人間関係を築くのも面倒だし。

「調理もできるって言ってたよな。いっそのこと店を仕切ってみるか？」

「それって私が店長代理になるってことですか？」

「そうだな。まあひとりで回すのは無理だろうから、ひとりふたりならバイトを雇ってもいい」
「ん〜、じゃあ知り合いに声かけますよ。それでもいいですか?」
「ああ、任せる」
そうして、一ヵ月ほどかけて店の引継ぎを行った。その後、４月中旬に出発したエルコンドルパサーを追って、俺はフランス行きの飛行機に搭乗した。

◇

シャルル・ド・ゴール国際空港からタクシーに乗って、パリ北部にあるシャンティイトレセン学園へ。
その門扉の前には、金髪のフランス美人が待ち構えていた。
「Ｂｏｎｊｏｕｒ。時間通り、あなたがムッシュ北川ね。よろしく、キャサリン・クラウドよ。キャシーでいいわ」
小さくウィンクをしながら、流暢な日本語で彼女はそう言った。

「北川令です。これから半年間、よろしくお願いします。キャシー」
「ええ、よろしく。レイと呼んでも？」
「よろこんで」
　握手を交わし、トレセン学園の中に足を踏み入れる。このシャンティイトレセン学園の一角を間借りして、エルコンドルパサーは練習を行っている。
　そして俺も、東条トレーナーの厚意により、この学園のトレーナー室の一室を借りることができた。
　広大なトレセン学園を３０分ほど歩くと、トレーニングコースが見えてきた。そこではちょうどエルコンドルパサーがランニングを行っているところだった。
　こちらに気づいた彼女が、大きく手を振ってくる。
「ブエナスタルデ～ス！　久しぶりデスね、北川さん。迷わずこれまシタか？」
「言葉が通じないのは不安だったけど、タクシーの運転手にはちゃんと通じたよ。これから凱旋門賞までの約半年間、よろしくお願いします。エルコンドルパサーさん」
　そう言って右手を差し出す。だが彼女は苦笑して、ニッと白い歯を見せた。
「硬いデスね～。アタシのことはエルで構いませンよ。敬語もいりませン。もっと楽にいきまショ～」
　人懐っこい笑顔を浮かべて、俺の右手を取る。こうした気安さが彼女の魅力かも知れ

ない。
「なら俺のことは令と呼んでくれ。改めてよろしく、エル」
「ハーイ。よろしく、レイ」
　とそこで、キャシーがパンパンと手の平を鳴らし、首を突っ込んで来た。
「友情を確かめ合ったところで、これからの話をしましょう。エル、レースが決まったわ。一ヶ月後のイスパーン賞。そのレースに出走してもらいます。よろしい？」
「望むところデ～ス」
　ビッとピースサインを作り、エルはランニングを再開した。
「こっちに来て一ヵ月でレースというのは、少し早くないですか？　しかもイスパーン賞はＧＩでしょう？」
「そうね。まあ勝てないでしょう」
「勝てないのに出走を？」
「適性を見るためさ」
　キャシーはただそれだけをつぶやき、続く言葉はなかった。

◇

　５月中旬、イスパーン賞を迎える。エルは地元のウマ娘を抑えて１番人気に推された。レースでは中団追走から最終コーナーで３番手に位置を上げ、最後の直線で先頭に立った。しかし２番人気のウマ娘に外から差され、２着に敗れた。
「予想通りですか？」
「いえ、私の予想ではボロ負けするはずだったの。そこから立ち上がれるかどうかを、見定めたかったのよ」
　試しに出走させたレースで得られた結論は、エルが優秀なウマ娘であるということと、この地のウマ娘も決して侮れるものではないということだった。
「あそこから差し切られるとは、やられまシタね～。さすがクロちゃんデス」
　レースを終えて帰ってきたエルを見るかぎり、敗北のショックはなさそうだった。だが蒼い瞳の奥は爛々と輝いていた。そこに潜む感情が何なのか、俺にはうかがい知ることはできない。
「おそらく彼女も出てくるわよ。凱旋門賞にね」
「大丈夫デス。大体分かったデスから。アタシ、同じ相手に二度負けたことはないんデスよ」

エルが決意を込めて呟く。ここから、世界との闘いが始まったのだ。

第六話

私が留学生として日本に行った時のことは鮮明に覚えている。わずか1年足らずの時間だったが、トレーナーとしてのキャサリン・クラウドを形成する大きな一助となった。

私の世話係であり、友人でもあった東条ハナという女性とは、今でも連絡を取り合う仲だ。

彼女の担当するウマ娘たちは、自国(フランス)のウマ娘たちと比べてもなんら遜色のない逸材ばかりだった。その中でもひと際目を引いたのは、シンボリルドルフというウマ娘だった。はっきりと、フランスでもこれほどの逸材はそうはいないと思った。

彼女が日本のダービーレースで優勝したこと、そしてそれに類するレースをふたつ獲得し、クラシック三冠という偉業を成し遂げた時、私は彼女がいずれフランスにやってくることを確信した。

その時、きっと我が友人は彼女の世話係に私を指名してくれることだろう。そんな期待を胸に抱いていた。

しかし、そんな未来はやってこなかった。凱旋門賞を最終目標に、その前段階として

遠征したアメリカで彼女は故障し、フランスの土を踏むことなく帰国した。
それから数年後、やってきたのはエルコンドルパサーというウマ娘だった。ハナから送られてきた資料やレース映像を見るかぎり、シンボリルドルフに負けず劣らずの傑物だというのは分かった。
だが時期が悪かった。今年はフランスダービーとアイリッシュダービーを制覇したブロワイエがいる。すでに欧州最強とも謳われる彼女の相手は、中々に厳しいものがある。
それでもハナの期待には応えたい。私にできる限りのことはしようと思った。まずはこの欧州の芝に適応させることだ。
日本の芝は、良く言えば綺麗に刈り揃えられていて、手入れが行き届いている。悪く言えば、人の手が入りすぎていて、お上品にすぎる。
欧州の芝はもっと無骨で荒々しい。丈が長く、地面は全くと言っていいほど整備されていない。まずこの走り難さに彼女たちは苦しむことになる。
エルも例外ではなかった。
車で例えるなら、スピードタイヤからオフロードタイヤに切り替える作業に、エルは大層戸惑った。
特に降雨の日などは、フォームがめちゃくちゃに乱れていた。レース映像を見るかぎ

り、悪路は苦手ではないと思っていたが、やはり勝手が違うらしい。
しかし次第に、そうしたバ場に合わせた走法へと変化していき、それに伴い筋肉の付き方も変わってきた。
適応能力には目を見張るものがある。もしかしたら、と思わせるウマ娘だった。
去年に世話をしたタイキシャトルもなかなかの逸材だったが、彼女は生粋のマイラーであり、凱旋門賞は視野に入れていなかった。実際1レースだけ出走して帰っていったしな。
一ヵ月ほどトレーニングを積み、たたき台となるレースに出走させることにした。ロンシャンレース場にて開催される、１８５０メートルのＧⅠレース、イスパーン賞である。
これを提示すると、エルは二つ返事でうなずいた。
正直に言おう。私はこのレース、エルは惨敗すると思っていた。私が確かめたかったのは、敗北から立ちあがる屈強な精神を有しているかどうかだった。
しかし、私の期待は良い意味で裏切られた。彼女は健闘するどころか、勝利に指がかかるほどのレースをやってのけたのだ。
そして彼女は、レース後にぞくりとする言葉を放つ。
――大体分かった、もう負けない

その時、私は初めてこのウマ娘を見て鳥肌がたった。笑顔の裏に隠された勝利への渇望、その執念。それはもしかしたら、シンボリルドルフよりも、ブロワイエすらも凌いでいるのではないかと思った。

事実、イスパーン賞を終えてから、エルの状態は急速に上向いていった。エルはようやく自分の身体を欧州仕様へと作り変えたのだ。

そして次走サンクルー大賞で、エルは完全に覚醒した。サンクルー大賞には全欧の一線級のウマ娘が揃い、近年最高のメンバーという評だったというのに、エルはそれをものともせずに優勝した。

興奮が抑えきれなかった。改めて認識した。彼女は凱旋門賞に挑戦するためにやってきたのではない。凱旋門賞で優勝するためにやってきたのだということを。

しかし予想外の事件もあった。日本では審議対象となるような激しいあたりも、欧州では平然と行われる。エルはその洗礼を受けてしまった。幸い大怪我にはならず、打ち身や擦過傷程度の軽傷ではあったが、エルの負けん気が悪い方向へと発揮されてしまう形となった。

いや、ここで引いてしまうようなウマ娘では、海外挑戦など考えなかったのかもしれないな。

トレーニングは多少ずれ込んでしまったが、スケジュールに大きな変更はなかった。

凱旋門賞の前哨戦として、常道通りフォア賞へと出走する。このレースは凱旋門賞と同じ距離、コースで行われる。

エルには本番と思ってレースをしろと指示した。だがこのレース、出走者が３人という少人数でのレースとなった。

そこにはイスパーン賞で先着を許したウマ娘もいた。だが、同じ相手に負けたことはない、との言葉通り、エルは雪辱を果たした。

その後、最終調整を経て、好調な仕上がりで凱旋門賞へと臨む。

ここらでそろそろ、もうひとりの客人についても触れておこう。エルを追ってやってきた記者、レイのことだ。

個人的な見解だが、マスコミというものは利用する人種であって、深く付き合うべき者たちではないと思っている。国は違えど、マスコミとはそういうものだろう。しかし、ハナからくれぐれもよろしくと頼まれている手前、無下に扱うわけにもいかない。

滞在中はトレーナー室の使用許可を申請した。後は好きにやるだろう。鬱陶しいようなら、ハナに抗議してやろう。トレーニングの邪魔をしないことを祈るのみだ。

しかし、私の危惧する事態にはならなかった。この男、どうにも記者らしくない。気になるであろう、出走するレースについてや、トレーニングの進捗について、まるで訊

いてこないのだ。
ふらりと練習中に現れては、世間話をしつつ、何枚かの写真を撮っていく。それだけだった。オフの日などは、エルと出かけたりもしているようだが、気分転換になるのなら、あの男にも利用価値はあるということだろう。
立場上、私はエルと馴れ合うわけにはいかないからな。
サンクルー大賞の後、彼の気安さには助けられたと思う。療養のため温泉にも行った。日本ほどではないが、フランスにも温泉地はあるのだ。ただ飲泉はあまり日本人はやらないらしいが。
その後もふたりはシャンティイ城やエッフェル塔などの観光地に行ったり、シャンゼリゼ通りで買い物や食事を楽しんでいたらしい。
良い療養になったと思う。
そのお陰かどうかはわからないが、秋のフォア賞は快勝した。
彼がらしからぬ行動に出たのは、この後だった。凱旋門賞の枠順も決まり、ブリーフィングを行った時だ。私も絆されていたのかもしれない。部外者であり、記者でもある人間をブリーフィングに参加させたのは迂闊だった。
「今、なんと言ったのかしら？」
自分でも信じられないくらいの低い声が、私の喉から発せられた。

第七話

俺がエルコンドルパサー号に魅了されたのは、彼のデビュー戦だった。スタートで出遅れて、最後方からのレース運びになった時、多くの者は諦めただろう。だが最後の直線、エルコンドルパサーは脅威の末脚で、最後方から一気に先頭へと躍り出た。しかも2着に7馬身差をつけた圧勝だった。

エルコンドルパサーはその出生から話題にはなっていたのだ。インブリードによって生まれたエルコンドルパサーは、その強すぎる配合に賛否両論あった。

否定的に捉えた者は危険な配合、肯定的に捉えた者は比類なき配合と言った。

そんな中で生まれたエルコンドルパサーは、特に気性難でも虚弱体質でもなく、言ってみれば普通の馬だった。

しかしその実態はまるで違うものだった。続く2戦目も、不良馬場をものともせずに9馬身差の圧勝。これはとんでもない馬が現れたと騒がれた。

本来ならばクラシック路線に期待するところだが、当時は規定によりクラシックレースには出走できなかった。

こちらの世界では何故かダービーに出走して、しかも優勝しているが。

とにかく、俺はデビュー戦で彼に魅了され、2戦目で虜になった。馬を追いかけて競馬場に行くというのは、生涯で初めてのことだった。

しかし世界を渡り、彼が彼女になった時、俺は以前ほどの熱意を向けられなくなっていた。何故かは分からない。結果を知っているということも、無関係ではないのかもしれない。

しかしひょんなことから、彼女の密着取材をすることになった。その時俺は、もしかしたら彼女を世界一のウマ娘にできるかもしれないと思った。

彼女がダービーを制覇したことからも、この世界は俺の知る世界に沿って進んではいるが、決して忠実に再現しているわけではないらしい。

だから俺は、彼女の未来を変えられるかもしれないと、思ってしまったのだ。

◇

「今、なんと言ったのかしら？」

キャシーの声色は固い。マンガなら恒例の怒りマークが額に描かれているだろう。

しかし一度言葉にしたことを取り消せるわけでもない。

「ただの展開予想ですよ」

エルはフォア賞で逃げ勝った。逃げて差すという強い勝ち方だったが、フォア賞は3人という少人数でのレースであり、感覚的には併走に近いんじゃないかと思う。

それを引きずったまま、凱旋門賞で流されるまま先頭に立てば、マズいことになってしまうのではないかと言ったのだ。

逃げには大別して2種類ある。能力でゴリ押しする力技の逃げと、知略を巡らせてレースを支配する逃げだ。

前者がサイレンススズカで、後者はセイウンスカイ。他にもいるが、直近で代表的なのはこのふたりだろう。

そして逃げという脚質は、脚を酷使する戦法だ。だからこそ逃げは王道ではないと言われている。事実ふたりとも故障している。いや、セイウンスカイはまだ無事だが、多分これから故障する。

だから東条トレーナーは逃げを敬遠している。チームリギルに逃げ脚質のウマ娘がいないのはそのせいだろう。

マルゼンスキーは能力が高すぎて結果的に逃げになっているだけで。

「確かにアタシは逃げの練習なんてしてませんデシタが、なんでそんな話になるんデス

？」

「最内枠だからな。スタート次第では逃げる形になるんじゃないかと思って」

「でも逃げウマ娘がひとりいるわ。その娘が飛び出してくるんじゃないかしら？」

確か競り合わずに引いたはずだ。多分こっちでもそうなる。ならない方が話は早いんだが。

そもそもこっちだとモン……ブロワイエとの関係が不明なんだよな。同じトレーナーではないようだけれど、それに同じトレーナーだとしても、ブロワイエを勝たせるために走れなんて言うかね。

「別に公言しているわけではないでしょう。最近は悪天候が続いてます。当日のバ場はかなり悪いと考えた方がいい。そこで慣れない逃げという形になるといたずらにスタミナを浪費しかねない」

「その懸念は分かるけれど、じゃあなに？　わざとスタートを遅らせろとでも言いたいのかしら？」

「いえ、さすがにそれは悪手でしょう。俺が言いたいのは、最後の直線で余力を残す展開にしたいということです。エルの魅力は末脚だと思っていますから。ダービーのときのような」

「ダービー？　えっと確か……」

「スペちゃんを差したときのことデスね。まぁ、差し切れはしなかったんデスけどね～」
キャシーは思い出すのに一時かかった様子だったが、エルは瞬時に思い出し、合点がいったようだ。
ブロワイエとの最終的な差は半馬身だった。それがわずか半馬身なのか、それとも大きな半馬身なのかは分からないが、蝶の羽ばたきひとつで覆る可能性はある。
「単純なカタログスペックでは、エルはブロワイエと同等か、凌駕していると思う。けど能力で勝っているからといって、必ず勝てるというわけでもない」
それが通じるならシンボリルドルフが負ける理由なんてないわけだし。
「ホームアドバンテージ。そしてバ場の状態も、おそらく相手の有利に働く」
先ほど言った通り、これから劇的に天気が回復するのは期待できない。つまりバ場状態は良くて『重』、悪ければ『不良』となる。
史実だと過去数十年で最悪の、極悪馬場とまで言われたんだよな。
エルは悪道が苦手なわけではないが、日本の悪道とフランスの悪道はやはり違うだろう。ならばブロワイエに多少の利がある。
俺にウマ娘の機微は分からない。体格がどうだとか、肉付きがどうだとか、そういった表面上のことならまあ、分からなくもないが、それ以上のことや、心機となれば全く分からない。

それでも関係者たちや現地の目の肥えたファンが、今回の凱旋門賞は2強対決だと言っているのだ。

凱旋門賞に出られるだけで超一流のウマ娘には違いないのだが、どうやら彼ら彼女らの目にかかれば、ブロワイエとエルのふたりが頭ひとつ抜けているらしい。

「一記者の戯言ですが、考慮に入れていただけると幸いです」

やんわりとキャシーに告げ、エルへと視線を移す。

この世界の主役は彼女たちなのだ。所詮俺が出せるのは口だけだ。安全に2着を守るか。一か八かの勝負に出るか。決めるのは俺じゃあない。

「まあエルなら、普通に走れば2着には入れるよ」

俺がそう言うと、エルは一瞬目を丸くし、その後プクッとほほを膨らませた。

第八話

ゲート前、出走ウマ娘たちがそれぞれの方法で集中を高めている。その中で、ブロワイエだけがにこやかに笑みを振りまいていた。周囲のウマ娘たちに、あるいは観客席に。その視線はこちらへとは向いていない。離れているというのもあるが、それだけではない何かを感じ取るくらいの余裕が、エルコンドルパサーにはあった。

――ブロワイエはエルのことを警戒しているよ

令の言葉を思い出す。あれはフォア賞に出走する前のことだった。偶々ブロワイエを見かけて、挨拶をしに行ったらファンと間違われてサインをもらうことになった。だから、自分は歯牙にもかけられていないのだと知った。

だが令は逆だといった。警戒しているからこそ興味のないような素振りをしていると。最初は信じられなかった。フランスのスターウマ娘が、極東の島国からやってきたウマ娘を警戒するだろうかと。

しかしこのゲート前で、一瞥すらしないというのは逆に不自然ですらあった。

（ホントに警戒されているのかもしれませンね～）

まだ短い付き合いではあるが、令は時々おかしな視点で物事を捉える。記者とも、ま

してやトレーナーの視点とも違う。

彼は言った。エルはブロワイエを凌駕している、と。だが本人は逆であった。大きく劣っているとは思わないが、そこまではっきりと勝っているとは思っていない。

そして、令はダービーを引き合いに出すことがよくあった。今まさに、エルはダービーのスタート直後のことを思い出していた。

（似てマスね。この状況）

最内の1枠1番で、エルは最高のスタートを切った。そんな自分に追随してきたのは、キャシーの言っていた逃げウマ娘。そのウマ娘は一時並びかけたものの、すぐに身を引いて先頭を譲った。

（ここでキングは暴走したんデスよね）

皐月賞と同様に、ダービーもセイウンスカイが逃げてレースを引っ張るだろうと、多くの人がそう思っていた。エル自身もそういう展開になると予想していた。だが蓋を開けてみれば、先頭を取ったのはキングヘイローだった。

（皐月賞で2着だったキングは、ダービーで慣れない逃げを打ち、ペースを作れず大敗した。レイの懸念が当たりまシタね）

逃げウマ娘の後ろにつき、そのウマ娘をペースメーカーにして、スリップストリームで脚を溜めながら好位先行でレースを進める。これがエルのプランAだった。だがそ

れは瓦解した。自分が先頭で、抜き去られる気配はない。
（このまま押されるように走っていては、脚が残せない。となればプランＢに移行するしかなさそうデスね）
ここで下がるのは愚策だ。下手をすれば閉じ込められる。ましてやこの不良バ場である。知らず知らずのうちにスタミナは削られていく。
ここで脳裏をよぎったのは、またしても同期の顔。朗（ほが）らか笑顔のセイウンスカイであった。彼女が菊花賞でやってのけた戦略。
（仕方ありませン。ここはセイちゃんにも一枚噛ませてあげまショウ）
序盤はハイペースで進み、中盤にミドルペースまで落とす。ここで落とし過ぎてはいけない。このレースは菊花賞（３０００）ではなく凱旋門賞（２４００）。落とすペースは気付かれない程度の、ほんのわずか。そこで稼いだ、ほんのわずかのスタミナが最後の直線で活きてくる。
（スピードを落とすのはここ！　この上り坂デス！）
スタート直後の約４００メートルは平坦で、そこから最大斜度２．４パーセントの上り坂が続く。最初は勢いよく入り、懸命に駆け上がっているふりをしながら緩やかにペースを落とす。
そして坂を駆け上がった後に待っているのは、約６００メートル続く下り坂だ。
（坂はゆっくりと下ることがセオリー。そんな常識は、シービー先輩がぶっ壊したデス

よ！）

加速しながら坂を下る。本来ならそれは、大きく膨れ上がる危険を秘めた破滅の走法でしかない。だがその常識を覆したウマ娘がいた。クラシック三冠ウマ娘のミスターシービーである。

エルはその芸術家（マエストロ）とも呼べる走法を、尋常ではないほどの修練によって獲得した。

（想像以上にバ場が悪い。最悪デス！　一瞬でも気を抜けば一気に持っていかれマスね。でも！）

この高低差は京都レース場の比ではない。それでも、エルは普通に曲がる心算などまるでなかった。

（レイは言ってまシタ。普通に走れば2着には入れるよ、と。高評価なのか低評価なのか分かりセンが、それって要するに普通にやれば負けるってことでショ！　だったら、普通になんてやってらんないデスよ！）

2着だろうとシンガリだろうと負けは負け。それがエルの常識だった。レースにあるのは1着（勝利）か1着以外（敗北）だけである。

コーナーを抜け、ロンシャンレース場名物、偽りの直線（フォルスストレート）に入る。

欺瞞のペースでスタミナを稼いだ。坂落としでスピードを稼いだ。

それをこの偽りの直線で反故にするわけにはいかない。スパートをかけるべきタイ

ミングはここではない。

２５０メートルを駆け抜け、ゴールが見えた。残すは最後の直線。ダービーと、東京レース場とほぼ同じ距離、５３３メートル。この攻防ですべてが決する。

２６の瞳から発せられる、背中を突き刺すような視線。その中でもひと際強い、獲物を狙う獅子の如き眼光。

（――ブロ……ワイエッ!!）

振り返るまでもなく感じる。熱い汗が冷たくなるのを感じながら、それでもエルは走った。自分の中に残されたすべての力を注ぎ込んで、エルは遮二無二駆けた。

風の音が変わる。明滅する景色の中で、エルは自分が限界領域に踏み込んだことを確信した。

（今なら、レイの言っていた意味がわかる気がしマスね）

己の力で、この脚で、世界まで駆けてきたと思っていた。だが自分の中には多く仲間がいた。共に切磋琢磨した激戦のライバルたち。そんな彼女たちとの戦いが、確かな経験となって自分の魂に刻まれている。

歓声がさらに大きくなった。エルの耳が頻りに動いている。ブロワイエはすぐ後ろまで迫っていた。息遣いが聞こえるほど間近に。

（――残り、１００ッ!）

もはや駆け引きなど必要ない。必要なのは勝つという強固な意志のみ。

（――残り、５０ッ！）

ふたりが並んだ。

その時、エルの瞳に飛び込んで来たのは意外な光景だった。いつものようなスター然とした余裕のある表情ではなく、必死の形相になって走っているブロワイエが、そこにいた。

（相手も苦しいんだ）

自分が苦しい時は相手も苦しい。そんな当たり前のことを実感する。だからこそ、負けられない。負けたくない。

歯を食いしばる。奥歯が軋むほどに強く。

（負ける……もんかッ！）

多くのものを犠牲にしてきた……わけではないけれど、それでも大見得切って、多くの期待を背負ってフランスに来た。がんばっ[着2]たという賞賛などいらない。優勝という結果が欲しい。

「負けるもんかぁーーーッ!!」

ゴールは目前。距離にしてあと7歩。エルは最後の力を振り絞り、ターフを強く踏みつけた。

怪鳥は翔(と)ぶ。
伸ばしたその手で夢を掴むために。

――この日、日本の怪鳥は世界の怪鳥となってパリの空に舞った。

第九話

あの激闘から数日後、エルはキャシーのトレーナー室のソファに座り、気の抜けた顔で天井を眺めていた。

渡仏した彼女の面倒を見てくれたのは、今も隣の執務机で仕事をしているキャサリン・クラウドというトレーナーだった。彼女は日本に留学した経験もあり、日本語は堪能だった。トレーニングは厳しいものだったが、むしろそれは歓迎すべきことだ。なにしろこちらは、世界最高峰のレースで優勝を目論んでいるのだから。

それよりもエルを悩ませたのは言語の壁だった。カタコトのフランス語しか喋ることのできないエルでは、友人を作るのも難しい。持ち前の積極性で何人かのウマ娘と友好を深めることはできたが、日本の学友たちとはやはり違う。最初の頃は心細さも感じていた。

（カイチョーもこんな気持ちだったんデスかね～）

ふと、取材の時に零した令の言葉がよみがえった。完璧超人に見えるシンボリルドルフにも若い時代はあったはずだ。その頃に渡米した彼女はどんな生活をしていたのだろうか。英語には苦労しなかっただろうから、交渉や雑務なども自分で行っていたのか

もしれない。

（チョット信じられまセンね～。アタシはトレーニングで手一杯デス）

エルはトレーニング以外のことは、すべてキャシーに任せていた。トレーニングに必要なものの手配や、レースの出走登録など。日本では東条ハナがやっていたことを、こっちではそのままキャシーが行っている。

（割と似てマスよね。あのふたり）

その手腕や雰囲気など、東条ハナに近いものを感じた。一時期リギルのサブトレーナーをやっていたと聞いて、エルはその時に影響を受けたのだろうなと勝手に思っていた。

そして洋芝のコツを掴むのに苦労している頃に、あの男がやってきた。

良く言えば柔和な顔で、悪く言えばとぼけた顔で。

常に気を張った顔をしているキャシーとは正反対のような顔だった。

（今思えば、あのとぼけた顔にけっこう助けられたんデスね～）

緊張状態が長く続けば、精神にも影響が出始める。令はそれを上手く解してくれた。トレーニングが終われば気遣うような言葉をかけてくれて、差し入れなどもあった。オフの日には買い物や観光にもつき合ってくれた。最初は誘われるばかりだったが、次第に自分からも誘うようになった。

フランス語を忘れて会話できるというのも、大きな安らぎとなった。

（ああ見えて意外と気が利くんデスよね）

歩道を歩くときは必ず車道側を歩くし、ベンチに座る時はハンカチを敷いてくれる。これをキザと取るかは相手次第だが、悪い気はしないだろう。アメリカではレディーファーストの文化があるため然程珍しくもないが、日本人でこういったことをやる男性は珍しい。

エルは自分でも気づかぬうちに、好意に近いものを感じるようになっていた。

（あんまり記者っぽくもないデスしね）

彼は取材らしいことをあまりしなかった。その代わりとばかりに写真はかなり撮られた。新しい服を買ったときは、必ずと言っていいほどだ、もっとも、そのデータを貰ってグラスワンダーに送っていたのだから、エルも悪い気はしていなかったのだろう。

（悔しいデスが、おハナさんの手のひらの上でシタか）

シンボリルドルフ（前回）の二の舞を演じないように、とのことだろう。彼女は令に清涼剤としての役割を期待した。キャシー（ムチ）に対しての令（アメ）を用意したのだ。

結果を見れば、彼はその期待に見事応えたといえるだろう。

「おっと、そろそろ始まるな」

黙々と書類仕事をしていたキャシーがリモコンを操作してテレビを映す。そこに

映ったのは、神妙な面持ちで記者会見を始めるブロワイエの姿だった。ソファーでだらけていたエルも前のめりになって画面に視線を向ける。

　記者会見が始まった。最初は当たり障りのない質問から。そして今後の予定を聞かれたブロワイエの口から飛び出した思いがけない言葉に、キャシーは目を瞬かせた。

「ジャパンカップに出る……だと？」

「え？　ジャパンカップに？　ブロワイエが？」

　ジャパンカップの開催まで、残り二ヵ月もない。調整期間としてはかなり短いだろう。

「負けっぱなしは性に合わない。彼女のホームでリベンジする、だとさ」

「……それって、アタシに出てこいってことデスよね？」

「だろうな。だが、まだ疲労は抜けてないだろう？　無理に付き合う必要はないと思うがね」

　と、キャシーは至極真っ当な意見を口にした。相手の都合に合わせてレースに出る必要などないのだ。

「条件は相手も同じデス！　それにアタシ、挑戦するのも好きデスが、挑戦されるのも嫌いじゃないデスよ。キャシー、日本行きのチケット、ふたり分よろしくデス！」

　そう言って、エルは部屋を飛び出していった。残されたキャシーは嘆息しながらも、

素早い手つきでスマホを操作し始めた。

◇

住めば都とは良く言ったもので、フランスでの生活は悪いものではなかった。用意された一室も、さすがはフランス随一のトレセン学園だけあって快適だった。

言葉の問題はあったが、半年も暮らせば日常会話くらいなら何とかこなせるようになった。人間の学習能力というのもバカにできない。

激闘の凱旋門賞から一週間が経った。

エルは一ヵ月ほど休養して日本に帰ることになるらしい。

エルにアドバイスをするかどうかは、実際に言葉にする直前まで悩んでいた。何故なら変えた未来がより良いものになる保証などどこにもなかったからだ。

もしかしたら、2着にすら届かず惨敗するかもしれない。

もしかしたら、転倒するかもしれない。

もしかしたら、大怪我をするかもしれない。

そんなことを考え出すと、軽々に口にすることが憚られたのだ。
俺が口を出すということは、エルはともかくキャシーにとっては間違いなく腹立たしいことだろう。
例えるなら野球観戦をしている素人が「ヘボ采配め！　俺に監督やらせろ！」とのたまうようなものだからだ。
最初の頃にこんなことを言っていたら叩き出されたかもしれないな。
半年の成果ともいうべきか、自分で言うのもなんだが、採用はされずとも、一考に値するくらいの信頼は築けたと思っている。
だからこそ、あの時ブリーフィングに呼ばれていなければ、たぶん俺はレースが終わる頃まで悩んでいただろう。
「まあ、結果オーライと言うべきかな」
無事に勝ったのだから、それで良しとしよう。
凱旋門賞の記事についてはすでに編集部へ送ってある。半年間の密着取材については、増刊号でまとめることになっていた。
俺は今その推敲をしているところだ。とそこで、ＢＧＭ代わりに点けていたテレビに、ブロワイエの記者会見が映し出された。
フランス語だったので詳しくは分からなかったが、ジャパンカップという言葉が聞こ

えて、なんとなく察した。
フラグは折れていなかったらしい。
俺はそのまま仕事を続けていたが、その作業をノックの音に邪魔された。客人は見知った顔で、現在フランスで最も有名になったウマ娘だった。
「エルか。どうした？　俺は密着取材のまとめと”栄光の３日間”の準備で忙しいんだが」
「居残る気マンマンじゃないデスか。ワインはもうたらふく飲んだデショー。早く日本に帰るデスよ」
「なんでそんなに慌てて帰るんだ？　休養はどうした」
「……ブロワイエの会見を見てたんじゃないんデスか？」
なに言ってんだコイツ……みたいな目をエルが俺を見てくる。ブロワイエがジャパンカップに出るのが関係しているのか？
「直接言葉にはしなかったみたいデスけどね、あれは挑戦状デスよ」
「そうは言ってもな。ジャパンカップには出ないはずだったろ」
レース後の記者会見で、今後の展開を聞かれたエルは、休養を挟んで有《ｆｏｎｔ：ｕ１４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の出走を目指すと答えた。日本の記者からジャパンカップについての質問もあったが、未定と答えた。

だが未定というのがマズかったらしい。ネットを探ってみると、気の早いニュースサイトにはブロワイエのリベンジレースなどといったことが速報で書かれていた。
「でもここで引いたら勝ち逃げしたと思われるデスよ」
「そっちはスペシャルウィークに任せればいいんじゃないか？」
それが本来の流れだし。
「ん～？　でもスペちゃん、この間の京都大賞典で7着でシタよ？」
そういやそうだったわ。何やってんだよスペちゃん。そこまで忠実に再現しなくてもいいのに。
「グラスはメキメキ強くなってマスけどね～」
グラスワンダーって今回のジャパンカップに出てたっけ？　記憶にないってことは出てないか、出てたとしても連に絡まなかったか。
俺の記憶違いの可能性もあるが、グラスワンダーって強いけど隙あらば怪我してるってイメージなんだよなぁ。トウカイテイオーほどじゃないけど。
「それでもアタシ（主役）がいないと盛り上がりに欠けるってもんデスよ。それにジャパンカップは賞金的にもおいしいレースデスからね」
「ほう、意外だな。エルはそういう理由でレースは選ばないと思っていたが」
「日本の偉い人が言ってたらしいデスよ。こんなんなんぼあってもいいデスからね～っ（お金は）

て」

それホントに偉い人か？　間違った情報渡されてない？

「稼げるときに稼いでおくデスよ。レイは収入よりやりがいとかを優先させそうデスからね」

「なんで俺の収入に話が飛ぶかわからんが、俺には大儲けの種があるからな。来年には大金持ちさ」

なにせこの世界ではウマ娘レースは世界的なエンターテインメントだ。しかも凱旋門賞ウマ娘の、プライベート（オフの日の）写真満載の写真集じみた特集雑誌である。月刊トゥインクルのバックアップもあるし、発売前から勝利が約束されているようなものだ。これで印税がガッポガッポという寸法よ。勝ったなガハハ！

「そういうのは捕らぬタヌキの皮算用って言うデスよ」

エルが言いながらジト目で俺を睨んでくる。お金の話になったからお金の話を返しただけなのに、解せぬ。

「そんなことより！　さっさと帰って日本仕様に脚を戻さなければなりませン。４０秒で仕度するデス！」

「４０秒はキツいぞ。せめて４０分くれ」

そもそもなんで俺まで慌てて帰らなきゃならないんだ。まあ取材対象（エル）がいなけりゃ

俺に滞在理由なんてありゃしないんだが。
ため息を吐きながら、部屋を見渡す。
来るときはカバンひとつであったが、半年も暮らしていればそれなりに物は増える。
まあほとんどが日用品なので、持ち帰って荷物になるよりはキャシーに処分してもらった方がいいだろう。
本来ならば、エルはジャパンカップどころか有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念にも出走することはなかった。
ここから先は、俺の知らない完全なもしもの世界。
この世界に生きる彼女たちの運命は、まだ誰にも分からない。

第十話

「ただい――ま？」
「いらっしゃいませ。おひとりですか？」
「アッ、ハイ」
「ではこちらのお席にどうぞ～」
メイド服を着たウマ娘に奥の席まで案内される。
あれれ～、おかしいぞ～。ここ、俺の店だよな。
改めて店内を見回すが、確かに俺の店だ。内装は少し変わっているが。
しまったな。表からではなく裏から入るべきだった。
というか客入り凄いな。８割くらい埋まっている。
仕方ない。とりあえず頼むか。アイツの腕を確かめてやろう。
「すいません。ホットコーヒーひとつ」
「かしこまりました。しばらくお待ちください」
ニッコリ笑って栗毛のメイドさんがしずしずと下がっていく。
知らない子だな。まあ俺がアイツと一緒に顔合わせ[面接]したのはひとりだけだから、新し

く雇ったんだろう。
　一応業務報告（メール）は毎週届いていたので、ある程度の状況は把握していたが、まさかメイド喫茶になっていたとは、見抜けなかった。この俺の目をもってしても。
　妙に売り上げが上がっているとは思っていたが、こんな秘密があったとは。別に趣味でやっているような店だからこだわりなんてないけど、報告しなかったのは俺が怒ると思ったのかね。
　いや、帰ってきたらバレるんだからそれはないか。
「やはりこのお店のメロンパフェは格別ですわ！　何杯でもいけますわよ！」
「おいおい、そろそろやめとけよ。１杯だけっていうからこっそり連れてきてやったのに、もう3杯目じゃないか。さすがにふと――ぐふっ！」
「失礼、ほほに蚊がとまっていらっしゃったので」
「もう１０月なのに!?」
「そんなに心配せずとも大丈夫ですわ。このパフェには希少糖が使われていますの。希少糖はカロリーゼロですのよ」
「え、そうなのか？　いや待て、希少糖のカロリーはゼロでもメロンやクリーム自体には――ぎゃんっ！」
「それも問題ありませんわ。これだけキンキンに冷やしてますもの。冷たくすることに

よってカロリーはゼロになると聞きましたわ」
「なんだその超理論は。そもそも冷やしてカロリーゼロになるなら希少糖うんぬんのくだりは――げるぐぐっ！」
騒がしいカップルだな。いや、あれスピカのトレーナーじゃね？　ならあの葦毛の子は担当のウマ娘かね。こんな郊外の店までよく来たもんだ。
挨拶は……別にいいか。プライベートの時間を邪魔しては申し訳ない。
「お待たせいたしました。ホットコーヒーです」
「ああ、ありがとう」
丁寧な仕草でコーヒーと付属の菓子を置くと、メイドさんは一礼して下がっていった。
てっきり「おいしくな～れ。ラブラブキュン！」とかやると思ってたんだけど、もしかしたらメイド服っぽい制服なだけでメイド喫茶じゃない？
そういえば最初も「いらっしゃいませ」だったな。メイド喫茶なら「おかえりなさいませ」だもんな。
ふむ。俺の早とちりだったのかもしれん。
「――ムッ！」
なんだこのコーヒーは！　メチャクチャ美味いじゃねぇか！

なんつーか気品に満ちた味っつーか、例えるならアイルランドのお姫様が飲むような味っつーか、スゲー爽やかな美味さだ。

それでいてお値段据え置きで、しかもスコーンまで付いている。

このスコーンも絶品だ。単体では少し物足りなく感じるが、ジャムと合わせることで美味さ倍増倍率ドン。

サッパリとしたスコーンに濃厚なジャムが良い塩梅で絡みつく。

スコーンがジャムを、ジャムがスコーンを引き立てる。

ハーモニーつーか、味の調和っつーか、とにかく相性がバッチリなんだ。例えるならユタカとスーパークリーク、ユタカとスペシャルウィーク、ユタカとメジロマックイーン！

……この半年でどんだけ成長してんだアイツ。マズいぞ、これは。この味に慣れた客に俺のコーヒーなんか出したら大クレームじゃないか。

「もうこの店はアイツに任せた方がいいかも分からんね」

エルの凱旋門賞特集雑誌で稼いだ金でアパートでも建てて、家賃収入とこの店のオーナー収入で暮らした方がいいかもしれん。

そんでたまに記事を書いたり予想屋で稼いだり。それがいいな、そうしよう。

簡単な将来設計を描き、俺は伝票を持って立ち上がった。

「ごちそうさま。美味しかったよ」
「ありがとうございます。千円からお預かりします。こちらお釣りになります」
そう言ってメイドさんが俺の手を取って包み込むようにつり銭を渡してくる。
あぁ、なるほど。これがアイツのやり方(戦略)か～。
こりゃ男はコロッといくわな。
アイツの経営手腕に感心しつつ、店を出た俺はすぐさま裏口に回った。
「ただいま」
先ほど言った帰宅の挨拶を繰り返す。今度はちゃんとした返事が返ってきた。
「あ、おかえりなさい店長。遅かったですね」
「ちょっと電車が混んでいてな」
「……そういうありきたりなボケはいいですから」
パスタを調理しながら振り返った葦毛のウマ娘は、小さく笑いながら出迎えてくれた。
洗い物をしていた鹿毛のウマ娘もペコリとお辞儀をしてくる。俺が面接したウマ娘だった。
「これ土産だ。チョコとかクッキーな。色々あるからみんなで食べてくれ」
「はい。ありがとうございます。店長」

「あとこれはおまえに。ボディクリームだ」
「そんなに気を遣ってもらわなくても良かったのに」
　こうして会話をしながらも手は止まっていない。相変わらず器用なものだ。歩合制にしたことがここまで功を奏するとはな。
「しかしあの制服には驚かされたぞ」
「え？　でも制服を作ることは知らせてましたよね？　ああ、写真は送ってませんでしたか」
　コイツがひとりの時は、私服にエプロンだけだったからな。雇う人数が増えたことで制服を作りたいとの希望は聞いていた。まあ全部任せた俺にも責任はあるのか。
　そういえば何を言われても、任せるとか、構わんやれ、とか返事をしていた気がする。自分の店なのに関心なさすぎだな。コイツが平気の平左でいるのも当然の帰結か。
「すぐに復帰されるんですか？」
「いや、しばらくは編集部と打ち合わせなんかをしたりして、その後はドバイかアメリカに行くかもしれん」
「……ドバイワールドカップとブリーダーズカップですか」
「そのようだ」
　帰りの機内で、エルと今後の話をした。どのレースを世界三大と定義するかは人それ

ぞれだが、エルの中では凱旋門賞、ドバイワールドカップ、ブリーダーズカップ・クラシックの三レースらしい。

ドバイワールドカップの開催が3月。ブリーダーズカップの開催が11月なので、無理をすれば1年で両方獲ることが可能だ。馬じゃないから輸送のストレスとかもないだろうしな。

ウマ娘に入れ込むなんてことは今までなかったのだが、この話を聞いて、俺は不覚にもワクワクしてしまった。

コンドルはどこまで飛んでいけるのか。

もしかしたら俺は、彼女に出会うために生まれてきたのかもしれない。

ならば見届けよう。コンドルの行く末を。

あの太陽のような笑顔の、夢の続きを。

転生した

第Ｓ話

凱旋門賞、そしてドバイワールドカップを制したエルコンドルパサーは、最後の大レースを勝つ為にアメリカへと渡った。

そこでエルコンドルパサーは、生涯で初めての経験をする。

同じ相手に二度負けるという経験を。

世界に羽ばたいた怪鳥は、アメリカのウマ娘たちも警戒するところだった。エルコンドルパサーの脚質は、基本的に差し先行よりではあるが、逃げだろうと追い込みだろうとやってのける器用さがあった。

そして高いスポーツＩＱとレースセンスは、変化する状況に対応できる柔軟さを持っていた。

要するに、隙が無い。それはもはや皇帝の域にまで達していた。

実際エルコンドルパサーは、渡米して出走した重賞レースを２連勝していた。そして３戦目のレースで、彼女に出会った。

アメリカ遠征中の、サイレンススズカに。

初対決はＧⅡ毎日王冠。完敗だった。自分がまだ成長途中だったとか、相手が絶好調

だったとか、そんな言い訳などしたくはなかった。

２戦目はＧＩ秋の天皇賞。結果から言えば、エルコンドルパサーは勝った。だが本人はそれを勝利とはカウントしていなかった。無効試合というのが正しいだろう。

そしてアメリカで行われた3戦目。それは毎日王冠の焼き直しだった。エルコンドルパサーが選択したのは、好位先行でレースを進め、最後の末脚で差し切るという、いわば王道的なプラン。

だが結果は、1バ身とどかずの2着だった。

その時、とどかない1バ身を追いながらエルコンドルパサーは思った。これは完成された強さだと。

他のウマ娘たちがレースをしている中で、サイレンススズカだけがタイムアタックをしている。

最初から最後まで先頭を譲らない。他者の介入を許さぬ絶対領域の中心に居座っているのだ。

そして4度目の対決を迎える。世界三大レース制覇という偉業のかかった本番レース。ブリーダーズカップ・クラシックというダートレース。

ちなみに、アメリカのダートは日本のダートが意味する『砂』とは違い『土』を意味する。コースは煉瓦を砕いた赤土のような路盤となっており、日本の芝レース並みの走

破タイムが出る。
距離は１０ハロン（約２０１２ｍ）、さらにサイレンススズカの得意な左回り。そしてとどめとばかりに、枠順は１枠１番と、エルコンドルパサーにとっては不利の三重奏であった。

◇

今回の渡米には、万全を期すために東条トレーナー自身が同行していた。リギルについては臨時にサブトレーナーを雇い、その総括をスピカトレーナーに頼んだらしい。
まあスピカトレーナーもそろそろベテランと言ってもいいトレーナー歴だし、大丈夫だろう。そもそも俺が心配すべきことではないがな。
その東条トレーナーだが、なかなか煮詰まらないブリーフィングに頭を抱えていた。それほどサイレンススズカという相手が厄介らしい。
まさかなぁ。サイレンススズカの続きが、ここまで凄まじいものだとは、予想もできなかったよ。

この世界でまことしやかに噂されている「ウマソウル」なるものの存在。根拠もなにもないが信じられている都市伝説のようなもの。

このウマソウルには《名前》が刻まれており、これを宿すウマ娘が競走ウマ娘になれる。そしてこれが活性化を始めることが本格化と呼ばれるらしい。

逆にこれが衰退を始めると、ウマ娘は引退を考え始める。おそらくだがこれは、競走馬の引退時期にも関係しているのではないかと思う。

競走馬の引退理由は大きく3つある。

まずは普通の引退だ。ピークを過ぎて、これ以上は苦しいだろうなと関係者が判断して引退させる。

次はセカンドライフを見据えた引退。まだまだ走れるが、元気なうちに引退させて、その血を次代に残してもらおうと考える。

エルコンドルパサー号はこれだ。

最後は怪我。怪我に泣かされた競走馬は多くいる。怪我から復帰できず、結局は引退することになった競走馬は意外に多い。

サイレンススズカ号はこの3つ目の、最悪のケースだった。レース中に怪我をして、そのまま眠りについた。

「あなたは何かある？」

東条トレーナーから水を向けられ、ハッとなって顔を上げる。
俺は凱旋門賞以降、レースに関しては口出ししていない。ドバイのレースとかアメリカのレースとか、一切知らないからな。
付け焼き刃で色々と勉強もしたが、所詮は付け焼き刃だ。本職のトレーナーとは比べることも烏滸がましい。
それでも意見を求める辺り、かなり行き詰っているようだ。
「策と言えるほどのものではないですが」
そう前置きして続ける。
俺の策とも呼べぬ策を聞いたふたりの反応は、まあ概ね予想通りだった。
「レイはマンガの読みすぎだと思うのデスよ」
まあそう思うよなぁ。東条トレーナーも眉を顰めている。
「確かに実現性は低い……が、成功した時の効果は大きいでしょうね」
「えええ……でもこんな作戦は、当たれば大ダメージデスが、命中率の低いハンマー武器みたいなもんデスよ?」
上手い喩えだな。失敗すれば大きな隙ができる。
「ハンマーね。言い得て妙だわ。パワーは問題ないと思う。問題なのはタイミングね。これだけは、エルの才覚に頼るしかないわ」

「本気でやるつもりデスか？」
「一番、当たれば大きい策ではある。それにこの策は、この枠順でしか成し得ない策よ。これは天の配剤ではないかと、私は思う。エルはそう思わない？」
「それは、そうデスが……走行妨害（反則）にはならないデスか？」
「ならない……はずよ。斜行でも押圧でもないわけだし。敢えて分類するなら、技術でしょうね」
「ムムム……」
「……気が乗らないならやめておく？」
東条トレーナーが気遣うように声をかける。まあこれは奇策というより博打のようなものだ。しくじれば大きく差をつけられる。
何より真っ向勝負を好むエルには承引し難い策だろう。
「いえ、やりマス。そのくらいやらないと、今のスズカさんはとめられそうにないデスから」
東条トレーナーが立てた策には王道もあれば奇策もあるが、言ってみれば常識の範疇ではあった。
本当にそれでサイレンススズカに勝てるのか？　というのがエルの本心だったのだろう。そして東条トレーナー自身もいささか懐疑的に思っている節があった。

それほどサイレンススズカというウマ娘の能力は突出している。

例えるならシンボリルドルフが先攻で制圧盤面を構築するタイプなのに対して、サイレンススズカは初手でエクゾディア（勝利条件）を確実に揃えてくるタイプだ。

シンボリルドルフは己の手札次第でどうにかできるかもしれないが、サイレンススズカに対抗するには、ルールに介入するしかない。

要するに「スズカさん、初期手札はお互いに4枚で開始しまショウ」と提案するわけだ。無論サイレンススズカにこれを受けるメリットはない。だが受けてもらう。無理矢理にでも押し通す。そうしなければ勝負自体が成立しないから。

繰り返しになるが、今のサイレンススズカはそれくらい極まった強さを持っている、ように思えた。

加えてこれは、あくまで俺の予想にすぎないが、彼女はまだ奥の手を隠しているような気がする。

そんな予感を掻き立てられるほど、彼女はミステリアスな雰囲気を持ったウマ娘だった。

「……そう。まあ、普通のトレーナーなら出てこないような策ではあるわね」

東条トレーナーが呆れたようにこちらを見る。

俺はそれに苦笑で返した。

「では作戦を詰めましょう」

そう言って、東条トレーナーはコースの描かれた白板に目を向けた。

サイレンススズカの未来（IF）とエルコンドルパサーの未来（IF）が、本来なら交差することのなかった道が、この世界では交わることになった。そのことに俺は、奇妙な高揚感を抱いていた。

◇

渡米して少なくないレースに出走してきたサイレンススズカだが、スタートに失敗したことは一度もない。

逃げウマ娘にとってスタートの失敗は即座に敗北を意味する。それを見逃してくれるほど、アメリカの強豪ウマ娘たちは甘くない。

スズカがこれまで勝ち続けてこれたのも、一度もスタートを失敗しなかったということが大きな要因となっている。

スタート前の奇妙な静寂が、スズカは好きだった。

元より静謐を好む性分だということもあるが、水を打ったような静寂と緊張した空気が、得も言われぬ快感を与えてくれる。
スタートのタイミングはもはや間違えようがない。
ゲートの開く「ガシャコン」という音の。
「ガ」で脱力状態から加速を作るための準備を始める。
「シャ」で重心の移動を始め。
「コン」で飛び出す。
スタートの基本であり理想形。
そしてここからがスズカの強みというか癖というか、言うなればルーティーンの始まりである。
一歩目で助走をつけ。
二歩目で力を溜め。
三歩目で最高速に達する。
この加速の鋭さ、最高速に達するまでの早さが、スズカ最大の強みである。
そこを――狙い撃つ。
スズカのルーティーンは正確にして精緻だった。だが自己完結した世界は外圧によって崩れやすい。それは針の一刺しでいい。

スズカの隣に位置するゲートに収まったエルは、ゲートの音など聞いてはいなかった。今エルが全神経を傾けて聴いているのはスズカのリズム。

最高のスタートを切るスズカより早くスタートするのは、事実上不可能と言える。そしてスタートタイミングが同じなら、加速の鋭いスズカが前に出るのは当然の帰結だ。

だからまともに張り合うのはやめる。

狙い撃つのは、溜めの二歩目。そこに合わせる。

スズカの二歩目が接地する瞬間に合わせて、エルは一歩踏み出した。

踏み出すと言うよりは踏み込む。踏み込むと言うよりは踏み抜く。

ハンマーで地面を叩くイメージ。

異次元の逃亡者の出足を挫く、雷槌の一撃。

そこで発生したわずかな揺れがスズカを襲い、彼女はたたらを踏んだ。

（ごめんなサイ、スズカさん。でもこれはレース（勝負）なんデス。タイムアタック（ひとり遊び）じゃあないんデスよ）

内側にヨレるスズカを斜めに見ながら、エルは前に出た。スズカほどの加速力はないが、他のウマ娘よりは鋭い。

エルは最初の攻防を制し、先頭へと躍り出た。

そして策は第二章へと移る。ここから先は、エルの手を離れた運否天賦。上手くいけ

ば良し。その程度の期待だった。
観客席から悲鳴が上がる。
内容は聞くまでもなく、サイレンススズカが出遅れた、だろう。
その状況は、他のウマ娘たちもすぐに気づいた。
ならどう考えるか。
――閉じ込めなきゃ！
と、そうなる。
言うまでもなく、スズカはこのレースの1番人気である。1番人気が1番強いということにはならないが、スズカに限って言えばそれはない。
アメリカのレースで無敗。
常に先頭でスタートし、先頭でゴールするウマ娘。
一度も追い抜かれず、一度も追い抜いたことはない。
そんな絶対的な強さを見せつけてきた。
このレースに出走するウマ娘たちはみんな考えていた。
サイレンススズカをどう攻略するか。
そんなところに異常が起きた。サイレンススズカの出遅れ（つまずき）。ありえない事態。正しく異常事態。

そんな異常事態に直面し、思考は一瞬フリーズするが、そこは一流のウマ娘たち。思考はとまっても、身体は反射で動く。
蓋をしなきゃ！　閉じ込めなきゃ！
これも一種の思考誘導と言えるだろう。そういう状況を、エルは構築したのだ。
これにて策は成った。
サイレンススズカを封殺した。
強靭無敵最強のサイレンススズカを、悪夢の鉄檻に押し込めた。

勝ったッ！　ＢＣクラシック完ッ！

とはならない。
エクリプスステークスを制したウマ娘がいる。
スーパーダービーを圧勝したウマ娘がいる。
それ以外のウマ娘も、いずれも劣らぬ強豪ばかり。
（重要なのはスタミナ配分デス。ハイペースを維持しつつも、最後の直線の末脚勝負に負けないだけのスタミナを残す！）
万事が上々吉の喜びと、先輩に対する申し訳なさがない交ぜになりながらも、エルは

飛ぶようにして先頭をひた走った。

これはアメリカのコース全般に言えることだが、日本や欧州に比べて小回りなコースが多い。このチャーチルダウンズレース場も例外ではなく、内ラチ寄りでスムーズにコーナーを回る必要がある。

（さすがにチェックが厳しい。小さなミスが致命傷になりかねませン。安穏と息を入れている場合ではなさそうデスね！）

軽やかにコーナーを２つ回り、向こう正面に入る。

レースは半分を過ぎた。ペースはやや速めだが、決して悪いものではない。脚は十分に残っている。

第３コーナーを回り、第４コーナーへ。

残すところは最後の直線のみ。そこにさしかかろうとしたところで、エルの視界の端に映ってはならないものが映った。

（なんでそこにいるデスかッ!?）

視界の端に映ったのは、白と緑の勝負服。大外を走るサイレンススズカの姿だった。

（あの鳥かごを脱出したデスか？　自力で脱出を？）

スタート直後、他のウマ娘たちが慌ただしく内に寄っていくのを、エルはしっかりと感じ取っていた。

一度構築された包囲網を脱するのは簡単ではない。

エルにしてみれば死人が蘇ったほどの衝撃だったが、実際に起こった出来事は、そう大したことではなかった。

全集中力をスタートに注ぎ込んでいたスズカは、死角からの一撃に脆くも崩れ去った。

勢い良くスタートした瞬間に強烈なはたき落としを食らったスズカは、それでもまだ余裕があった。

その後に構築された鳥かごに監禁された時も、特に焦った様子もなく、あぁこれからどうしようかしら、などと考えていた。

監禁されたまま、最初の直線を流されるままに走り続け、第1コーナーを曲がったあたりで、スズカは気づいた。

（隙間ができてる）

スズカを監禁していたウマ娘たちも、彼女を閉じ込めるためだけに走っているわけではない。当然ながら勝つために走っている。

先頭を行くエルを筆頭に、先行集団がスイスイ進んでいくさまを見れば焦りが生まれ、スピードは上がる。元々不格好だった包囲網は、第2コーナーにさしかかる頃には崩壊が始まっていた。

（あっち、こっち、そっち）

持ち前の観察眼と勘の良さで隙間に入り込む。最速の機能美とまで謳われた、極限まで空気抵抗を削ぎ落した身体と尻尾が風に乗るように、誰にも触れられずにスルリスルリと位置を押し上げていく。

柔軟な筋肉をしならせて走る独特のフォームは、ある種の神々しさすら生み出していた。

向こう正面の中間にさしかかる頃には、スズカは先頭集団に追いついていた。状況は最悪を脱し、悪くないものにまで持ち直している。それでもなお彼女は不機嫌だった。

（全然、楽しくない）

以前、彼女がまだ日本に居た頃、追い込みを得意とするチームメイトに聞いてみたことがあった。

――追い込みって何が楽しいの？

スズカをよく知らない者が聞けば、喧嘩を売っているのだろうか？　と思うかもしれないが、彼女をよく知るチームメイトには分かっていた。彼女はマイペースなだけで、決して悪気があるわけではないということを。

だからキチンと答えてあげた。

――最後方から他のやつらをごぼう抜きして先頭に立つ瞬間がたまらねぇんだ！

それはスズカには理解できない感覚だった。
忘れもしない、大怪我をしてからの復帰戦。スズカは出遅れて最後方からのスタートとなった。
その時は落ち着いて脚を溜めて、最後の直線でごぼう抜きして優勝した。
だが楽しいとは思わなかった。トレーナーや友人たちとの約束を守れたという安堵はあったが、気持ち良さや楽しさといったものは全く感じなかった。
そんな不満を感じながら、スズカは先頭集団の後ろにつけて、第３コーナーへと突入した。
（さすがにみんな、上手ね）
内に切り込むのは無理と判断したスズカは、ロスを覚悟で大外に進路を取った。
（まだいける。まだ走れる）
サイレンススズカ。
好きなことは走ること。
得意なことは、走り続けること。
その走りは美しかった。ひたすらに真摯で、滑らかで、涼やかで。
絵画の中から飛び出してきたかのような走行美に、人々は夢を見た。
最後の直線３８０メートル。スズカは頭の中でスイッチを入れた。

――強襲加速（イグニッション・アサルト）

女の子がぬいぐるみに名前を付けるように、スズカはなんとなく必殺技（それ）っぽい名前をつけた。その方が上手くいきそうな気がしたから。

それが効力を発揮したかはともかくとして、スズカは風の牙となって前方の３人に襲い掛かった。

（きたッ!!）

ぞわりとした悪寒を感じて、エルは振り返ることなく大敵が動き出したことを悟った。

かつて凱旋門賞で覇を競ったブロワイエの気迫は、例えるなら荒れ狂う暴風を想起させるものだった。

対してサイレンススズカの気迫は、噴火を控えた火山を前にしたような、目に見えない脅威を彷彿とさせた。

（このままじゃ、とどかない）

ひとりかわしたスズカは瞬時に状況を把握した。思いのほか離されている。このままではとどかない。だからスズカはもう一度、頭の中でスイッチを入れた。

――瞬天加速（イグニッション・ドライブ）

秋の天皇賞では、ここの加減を間違えて骨折した。だからスズカは学習した。
出力１２０％で折れるなら、１１９．９％でセーブしようと。
聞くものが聞けばこう思うだろう。
そうはならんやろ。
数値化なんてできんやろ。
そこに気づくとは、やはり天才か。
スズカはそれほど勝敗に頓着するタイプではない。脚が折れても勝とうなどとは思わない。
スズカにとって、走れなくなる（骨折する）というのは、負けに等しいのだ。
（だからといって、手加減はしてあげません）
全力を出せば骨折する。だから全力は出せない。けれど本気は出す。つまりはそういうことだ。

――ブースト１１９．９％！（ニア・アセンション）

蹴り上げた土塊（つちくれ）が天を舞う。稀代のスピードスター、サイレンススズカが、先頭の景色を奪うべく本格始動した。

その気配の変化をいち早く感じ取ったエルは、ざわつく心中に活を入れ、ほんの一瞬息を入れた。

その刹那の時間に、エルは乱れかけていたフォームを最適化し、再構築した。

できることはすべてやった。あとは、駆け抜けるだけだ。

逃げるエルコンドルパサー。追うサイレンススズカ。

常とは逆の構図に、観客は沸き立った。

ふたりの差が徐々に詰まり始めている。

その喧噪の中で、ふたりは無音の中にいた。

スズカは初めて、自分の絶対領域の中に踏み入ったウマ娘を認識した。

エルもまた、その牙城を崩さぬ限り、勝利はないと覚悟した。

（私にだって、負けられない理由はあります。トレーナーさん、スペちゃん、チームのみんなに、情けないところは見せたくない！）

（アタシだって負けられませン！　このレースに勝って、ワールド三冠ウマ娘になって、伝えるんデス！　この想いを！）

互いに負けられない理由がある。いや、レースに臨むウマ娘全員がそうだろう。それでも、いつだって勝者はひとり。たったひとり。

ふたりの夢が、決意が、流星となって駆けて行く。

ただ一点を突き破る錐(きり)のように。

意志の発露は二筋の光を描き、勝負は一瞬で決着した。

ゴール板を通過したエルは緩やかに減速した。ゼェゼェと肩で息をし、たまらず内ラチに手をかける。

スズカは蹲って、脚を抱いていた。まさか怪我をしたのかと不安にかられたが、どうもそういう雰囲気ではなかった。

それは自分の脚に、よく頑張ったねと褒めているようにも見えた。

(負けた……デスか……?)

ゴールした瞬間のことはよく覚えていない。並んでゴールしたことは覚えているが、どちらが勝ったかは分からない。

掲示板に目を向ける。着順はまだ表示されていなかった。

それでもエルの目には、スズカが自身の勝利を確信しているように見えた。

鼻の奥がツンとなり、瞳から涙があふれた。泣き叫びたい衝動を抑え込み、歯を食い

しばる。

（同じ相手に、３度も負けた！）

これほどの屈辱はない。

エルは無意識のうちに、爪が食い込むほど拳を握りしめていた。

とそこで、スズカがスッと立ち上がり、エルの方に向かって歩いてきた。

エルは涙を拭い、堂々とスズカと相対した。

「次は、負けません」

それだけを告げて、スズカは背を向けた。

エルはその言葉を呆然と聞いていた。

そして、観客席から怒涛の勢いである名前が叫ばれた。

エルコンドルパサー！

エルコンドルパサー！

エルコンドルパサー！

それが自分の名前だと気づいて、エルは再度掲示板に目を向けた。その最上段には、間違いなく自分の番号が記されている。

そこでようやく現状を把握したエルは、盛り上がり続ける声援に応えて大きく手を振った。

第SB話

郊外にある小さな喫茶店。何の広告も打たないその小さな店は、口コミだけで毎日盛況であった。トレセン学園からは2本のバスを乗り継がなければならないのだが、それでも毎週のように通っている生徒もいるとか。

この日、営業を終えた午後5時過ぎに訪れたのは、トレセン学園の制服に身を包んだふたりのウマ娘だった。

「ここがあの女のハウスデスね！」

意気揚々と裏口を睨みつけるのは、世界三冠という偉業を成し遂げたウマ娘、エルコンドルパサー。

「なにを今さら……何度か来たことはあるでしょう？」

隣でため息を零しているのは、彼女の親友であるグラスワンダーである。

「気分デスよ、気分。何せ相手はレイと二足の草鞋でこの店を守ってきたウマ娘（ひと）デスからね。油断はできませン！」

「それを言うなら二人三脚ですよ。はぁ……まったく。あの店長さんは北川さんに懸想しているわけではないのでしょう？」

「でもでも、身内でもないのに大事な店を譲るなんて普通ないでショウ？」
譲ったといっても、無料で譲ったわけではない。普通に売却しただけだ。かなりマケてはいるが、常識の範疇である。そして彼はそのお金と印税を元手に、念願の不労所得生活のためのマンション建築に動き出していた。
（たんに執着がなかっただけの気がしますけどね）
本当に大事なら何年もほったらかしにして海外になど行かないだろう。グラスワンダーはそう思った。
「三冠を獲ったときに、勢い任せで伝えていればよかったんですよ」
「うぐっ、それは言わない約束デスよ、グラス～」
優勝した直後はテンションＭＡＸで伝える気マンマンであったが、トロフィーの授与式やらウイニングライブやら記者対応やら、それらすべてが終わった後は疲れ果てて泥のように眠ってしまった。
そして一晩明ければ、急に気恥ずかしくなってしまったのだ。
帰国してからにしようと弱気になり、帰ってきてからも機会に恵まれず、なんとなくあの人に話を通すのが筋だろうと思い立ち、今に至る。
「なんにせよ、けじめはつけなければなりませン。お邪魔するデ～ス！」
勢いよく裏口の戸を開ける。中では閉店作業を行っているウマ娘たちがいた。

「どちら様？　ってエルコンドルパサーさん？　えっと、北川さんはもういませんよ？」
「知ってマス。お話があるのは店長さんデス」
「店長ですか？　店長は今ホールの……」
「私がなにか？」
　厨房とホールを繋ぐ通路から現れたのは、この店の店長である葦毛のウマ娘だった。
（やはりこのウマ娘からは妙なオーラを感じます。競走ウマ娘と同じような、少し違うような。気の所為でしょうか……）
　相手はただの喫茶店の店長だというのに、彼女を見ていると時折毛先がチリチリとするような、レース前の昂ぶりにも似たものを感じるのだ。
　グラスワンダーはそれが不可解だった。
「あら、お久しぶりですね。グラスワンダーさん、エルコンドルパサーさん。遅ればせながら、世界三冠おめでとうございます」
「ありがとうデス。今日はお話があって伺いまシタ」
「そう。ではこちらへどうぞ」
　ふたりは厨房の奥にある応接室へと案内された。そしてエルは前置きもなく、いきなり切り込んだ。
「レイにプロポーズをしようと思っています」

「そう。がんばってね」
「え？」
「え？」
　ふたりが顔を見合わせる。
「レイのこと、なんとも思ってないデスか？」
「そうね……」
　雇ってもらったことや店を任されたこと、そして店を譲ってもらったことに感謝はしているし恩義も感じている。だがそういう対象として彼を見たことはなかった。
　そもそも彼女は、令がタイミングを計っているだけの段階だと察していた。一応彼も良識人であり、エルが未成年のうちは気持ちを伝えないとでも決めているのだろうと。
　だが、少しだけいたずら心が生まれ、彼女は言った。
「じゃあ勝負をしましょう。レースで」
「え？　勝負デスか？　レースで？」
　キョトンとした顔でエルは同じ言葉を繰り返した。
「負けた方は彼を諦める。それでどう？」
「……アタシは世界三冠ウマ娘デスよ？」
「そうね。自信がないなら断っても構わないわよ」

それはあからさまな挑発であった。エルもそれは分かっていたが、なめられたままでは沽券に関わる。

「いいでショウ。レースの条件、日程、すべてそちらが決めて構いませン」

「では一ヵ月後。芝１８００ｍ。トレセン学園のコースでいいでしょう。使用許可を取っておいてください」

「了解デス。グラス、行きマスよ」

「ええ。コーヒーご馳走さまでした。とても美味しかったです」

「どういたしまして。今度はお客さんとして来てくださいね」

大股で帰るエルと、それをてとてとと追うグラスワンダーを眺めながら、彼女はクスッと笑った。

（若いわね。まあガッカリさせるわけにもいかないし、一ヵ月、本気で鍛えてみましょうか）

翌日から、喫茶店《珈琲館》は臨時休業に入った。

◇

そして一ヶ月後、決戦の日がやってきた。
トレセン学園、芝コースのゴール地点で「ゴール」の看板を首から提げたヒシアマゾンは、明らかにやる気がなさそうだった。
「たわけ。真面目にやれ」
「だってよ～。相手は中央トレセン学園の生徒じゃないんだろ？　勝負にならねぇよ。エルの勝ちだ。大差勝ちだよ。タイマンならまぎれもねぇだろうしな」
「……だとしてもだ。レースに絶対はない」
「今回に限りは絶対だよ。まったく、面倒な仕事だぜ」
やれやれと両の手のひらを空に向ける。エアグルーヴはそれ以上なにも言わず、スタート地点へと足を運んだ。
そこではふたりのウマ娘が、それぞれストレッチをしながらスタートの時間を待っていた。
（会長の記憶が確かなら、彼女はどのトレセン学園にも所属したことはないはずだ）
シンボリルドルフには一度見た人間、ウマ娘は絶対に忘れないという特技がある。それは写真、映像にまでおよぶ。事実彼女は、この中央トレセン学園に限らず、地方のトレセン学園も含めて所属するウマ娘の顔はすべて記憶している。それは過去にまでさ

かのぼる。
（会長の記憶違いなどありえない。アマゾンではないが、ないだろうな。何しろ相手が相手だ。世界でもトップクラスのウマ娘。１８００はベスト距離ではないが、関係ないだろう）
　エアグルーヴは表情を変えないまま、ふたりへと向き直った。
「時間だ。模擬レースを開始する。両者スタート位置へ」
　エアグルーヴに促され、ふたりはスタート位置へつく。
「用意……始め！」
　フラッグが振り上げられ、スタートが切られた。

「エルは後ろについたようね」
　レースを観戦していた東条ハナがぼそりとつぶやく。
「王道的戦略と言えなくもないが、エルコンドルパサーは調子が悪いのか？」
「いえ、そんなことは……ただＧⅠレース（いっも）と同じというわけには、いかないようです。エルは気分屋なので……」
　シンボリルドルフの疑問にグラスワンダーが答える。
「獅子搏兎というわけにはいかんか」

「そもそもなんであのふたりが模擬レースをしているんです？」
　そんな疑問を口にしたのは、この問題の渦中の人物であった。それを隣で聞いていた東条ハナはギョっとしてその人物に目を向けた。
「あなた……聞いてないの？」
「ええ、ただ招待されただけですので。何かご存知で？」
「……私の口から言うのはフェアじゃないでしょうね。勝った方に訊きなさい」
「はぁ。ではそうします」
　奇妙な違和感を覚えつつも、令は曖昧に返答した。レースはたいした変化もなく半分を過ぎ、１０００ｍ地点を通過した。
「１０００ｍのタイムは……５６秒８!?」
「速いですね」
「というか速すぎでは？　いくら１８００ｍのマッチレースとはいえ、これは……」
　東条ハナと令の会話に割って入ったのはグラスワンダーだった。その言葉には多少の驚きが含まれている。このペースで最後までもつはずがない。最後の直線でエルがかわして終わり。東条ハナもグラスワンダーも、同じ最終絵図を描いていた。
　だがシンボリルドルフだけは、厳しい目つきで眼下のレースを眺めている。
（５６秒８。手動ゆえに決して正確とは言えんが、浮花浪蕊（ふかろうずい）のウマ娘に出せるようなタ

イムではない。あの表情……かかっているわけではなさそうだな。だとすれば全て計算ずくということか）

続いて、その後ろを走るエルへと視線を移す。スリップストリームを活かすわけでもなく、斜め後ろを走るエルはニンマリとした笑みを浮かべていた。

隣で見ていた東条ハナは何も気づかない。もちろんグラスワンダーも。

しかし、シンボリルドルフに電流走る。

（精神状態の違いは、時として能力差（スペック）を覆す。強者は油断しても強者だが、慢心した瞬間に凡夫となる。あまり侮っていると……喰われるぞ）

慢心は天才を凡夫に変える。シンボリルドルフは大物喰いの可能性を、静かに感じ取っていた。

レースはついに佳境を迎える。最終コーナーを回り、最後の直線へ。

（残りあと４００。ここでかわして終わり、デス！）

前を走る相手は終始無理なペースで走ってきた。後はもうたれて下がってくるだけだ。それをかわして終わり。そのはずだった。

（差が……縮まらない？　これは、まさか、伸びてる!?）

その時、エルの脳内に嫌な記憶がよみがえった。届かない背中。縮まらない差。永遠

の1バ身。

起こるはずのないことが起こっている。逃げて差すなんてバカげた戦法が、あんな化け物が、ふたりもいていいはずがない。

とあるウマ娘の顔が頭をよぎる。天使のような笑顔で、悪魔のような強さを持ったウマ娘。エルはようやく理解した。これは窮地だ。現状を打破する一手を打たなければ、このまま押し負ける。

そう悟った瞬間、慢心は消えた。代わりに生まれたのは羞恥だった。レースが速いペースで進んでいるのは気づいていた。間違いなく、かかっていると思った。

だが違った。すべては掌の上。計算されたペースだったのだ。

残りあと２００メートルしかない。

いや、まだ２００メートルもある。

意識の刃を研ぐ。それは鋭ければ鋭いほどいい。

体勢を傾ける。さらに低く、さらに速く。

雑念が消え、思考がクリアになっていく。

――コンドルは飛んでいく（El Condor Pasa）

（そうだ！　アタシは！　エルコンドルパサー！）
蒼き瞳に炎が宿る。
脚に感じた熱さが全身に伝播していく。
怪鳥が翼を広げて羽ばたいた。

「アマゾン！　見極めろ！」
東条ハナの切羽詰まった声が飛ぶ。ゴール地点で寝転がっていたヒシアマゾンはその声に慌てた様子もなく、のっそりと起き上がった。
「ん？　おハナさん？　どうせエルが勝つんだから……うぇ!?　ゴ、ゴーール!!」
「どっちが前だ!?」
「え？　えーっと、もちろんエルが勝った、よ？」
ヒシアマゾンの曖昧な答えに、東条ハナは頭を抱えた。
「ルドルフ、あなたは見えた？」
「ええ、わずかですがエルコンドルパサーが先にゴールしました」
「そう。大番狂わせは起きなかったということね」
「エルコンドルパサーと競ったというだけでも大健闘だと思いますがね」
「そうね。タイムも……Ｇ１並みだわ」

東条ハナは唸るように言葉をもらした。

「アタシの……勝ちデスね」

肩で息をしながらエルが告げる。まさか本気を出すことになるとは思っていなかった。いや、本気を出させられたのだ。改めて思う――

（何者デスか？　このウマ娘は……）

エルは心中で低く唸った。

「あ～、それで、約束なんデスが……」

言い難そうに言葉を紡ぐ。負けるつもりはなかったが、もし自分が負けていたら、素直に諦められるだろうか。今さらながら、こういうのはフェアじゃないような気がしてきたのだ。

「別に気にしなくてもいいわ。私はあの人に好意は抱いているけれど、あなたの抱くそれとは別物なの。だからまぁ、これは茶目っ気というか少し揶揄いたくなったというか、そういうものよ。何が言いたいかというと、私に遠慮する必要なんかないってことね」

「……本当デスか？」

「本当よ。だから、行ってきなさい」

そう言ってエルの背中を押す。彼女は満面の笑みを浮かべて走っていった。入れ替わるように現れたのは栗毛のウマ娘、グラスワンダーだった。

「やはりあなたは、競走ウマ娘だったのですね」

「さあ、どうかしらね」

誤魔化すように答えをはぐらかす。自分の本当の名前を知っているのは両親だけだ。他の誰にも言うつもりはなかった。

トゥインクルシリーズに出走するには、当然ＵＲＡに届け出を出さなければならないが、その際には厳格な決まり事があり、そのひとつに「登録名は9文字以内でなければならない」というものがある。

彼女のウマソウル（魂）に刻まれた名前は、9文字を超えていた。何故なのかは分からない。彼女の母親がアメリカのウマ娘であることにも関係があるのかもしれないが、本当のところは誰にも分からない。

ただひとつ言えることは、トゥインクルシリーズで走ることができないということだった。

いや、手段を選ばなければ方法はある。偽名で登録すればいい。魂に刻まれた（本当の）名前は本人にしか分からないのだから。

だが彼女はそれをしなかった。魂に嘘をつきたくなかった。そして、不思議と海外で

デビューしようとも思わなかった。
（日頃から体は動かしていたけれど、やっぱり一ヵ月追い込んだ程度じゃあ無理か。これが世界を獲ったウマ娘の強さ……いえ、違うわね）
そんな単純なことではない。
「これが、積み上げてきた者の強さなのね」
才に溢れ、それに驕らず、ただひとつの道に邁進し、研鑽を積んできた者の強さだ。積み上げていない者に勝てる道理など、最初からなかったのだ。
無造作にある方向へと視線を向ける。その先では、ダークスーツ姿の男性の胸に飛び込んでいく少女の姿が見えた。
それを見て彼女は小さく笑みを浮かべた。
どこかから、リンゴーンという鐘の音が聞こえてきたような気がした。